

第3章 神殿の復元と考察

第3章 神殿の復元と考察

第2章では、メッセネ神殿の詳細な調査報告を行った。本章では、実測調査で得られた資料から神殿の復元を行っていく。各部寸法は平均値を持ってその復元値とした。

1. 周柱の平面の復元と考察

1) 柱間寸法の決定

神殿を復元するにあたり、基本となる柱間真々寸法（以下柱間寸法と呼ぶ）を決定するためにスタイロベート部材の分析を行った。外周部のスタイロベート部材については15個の部材を実測した。その中で正面長さがわかるものは4個のみ（ $\Delta 56$ 、 $\Delta 64+$ $\Delta 161+$ $\Delta 383$ 、 $\Delta 147$ 、 $\Delta X9$ ）であり、その寸法はそれぞれ0.962m、0.961 m、0.960 m、0.956 mであった。また、通常、スタイロベート部材と目地の位置を対応させるためほぼ同じ寸法に仕上げられる床舗装部材（2個実測）の正面長さは0.962 mと0.960 mで、平均値は0.961 mとなり、その誤差は2 mmである。同様に対応するトイコベート部材14個の部材長さは、平均値0.960 m（標準偏差0.009 m）であった。¹⁾ スタイロベート部材は外観上重要な列柱を載せるため、通常これらの部材より高精度で加工されるが、これら部材の平均値やその誤差の程度を考慮すれば、正面長さが分かるスタイロベート部材は4個しか出土していないものの、その本来の正面長さは4個の平均値として支障ないものと判断し、0.960 mと決定した。

結果として、柱間寸法はスタイロベート部材正面幅の2倍の長さとなるので、²⁾

$$0.960 \times 2 = 1.920 \text{ m}$$

と決定する。

次に、隅のスタイロベート部材については1個が出土しており（ $\Delta 96a + b$ ）、その大きさは $0.880 \times 0.888 \text{ m}$ である。また通常のスタイロベート部材の奥行き長さは $\Delta 96a+b$ を除くと、0.885m、0.880 m、0.884 m、0.884m、0.880 m、0.881 mの6個（ $\Delta 43$ 、 $\Delta 64+$ $\Delta 161+$ $\Delta 383$ 、 $\Delta 147$ 、 $\Delta 353$ 、 $\Delta X5$ 、 $\Delta X9$ ）のデータが得られた。隅のスタイロベート部材の2つの正面長さは、通常のスタイロベート部材の奥行き長さと一致するので、これら6個の寸法は理論上同じであるべきものである。しかし、その最大誤差は8mmあり、およそ中間値である0.884mや0.885mの部材も見られる。スタイロベート部材は、神殿の正面、側面で大きさが異なる場合もあるが、メッセネ神殿ではこれら少数のスタイロベート部材のどれも正面、側面のどちらに用いられたか判断できる証拠は何もない。また全体的な部材の仕上げの粗さなどを考慮して、これら6個の寸法の違いは有為なものではなく施工誤差であると判断し、6個と隅の部材の平均をとり奥行きは0.883 mとした。³⁾ したがって、通常のスタイロベート部材は正面、側面ともに同じであり、結果として隅のスタイロベート部材は正方形で、復元寸法（当初の設計寸法）は $0.883 \times 0.883 \text{ m}$ と決定した。

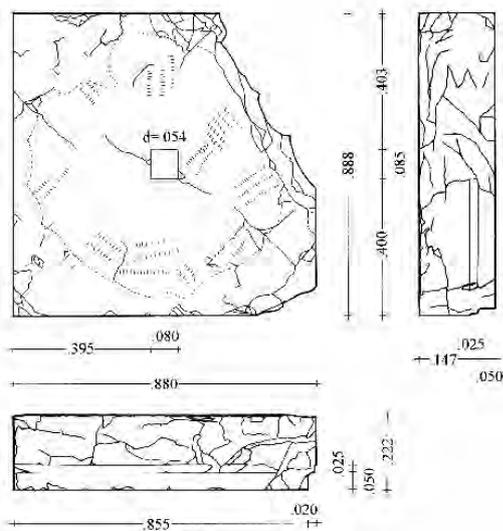


図 3-1 隅のスタイロベート部材

| 通常のスタイロベート部材寸法(m) | | | トイコベート部材寸法(m) | |
|-------------------|-------|-------|--------------------|-------|
| 部材名 | 正面長さ | 奥行き | 部材名 | 部材長さ |
| Δ43 | | 0.885 | Δ1 | 0.960 |
| Δ56 | 0.962 | | Δ8 | 0.958 |
| Δ64+Δ161+Δ383 | 0.960 | 0.880 | Δ15 | 0.961 |
| Δ147 | 0.961 | 0.884 | Δ16 | 0.942 |
| Δ353 | | 0.884 | Δ18 | 0.957 |
| ΔX5 | | 0.880 | Δ21 | 0.955 |
| ΔX9 | 0.956 | 0.881 | Δ48 | 0.973 |
| Δ96 (※) | | 0.888 | Δ131 | 0.954 |
| | | 0.880 | Δ143 | 0.955 |
| 平均 | 0.960 | 0.883 | Δ220 | 0.949 |
| | | | Δ243 | 0.976 |
| | | | Δ465 | 0.968 |
| 隅のスタイロベート部材寸法(m) | | | Δ575+Δ576+ Δ579 | 0.963 |
| 部材名 | 正面長さ1 | 正面長さ2 | ΔX8 | 0.963 |
| Δ96 | 0.888 | 0.880 | 平均 | 0.960 |
| 床舗装部材寸法(m) | | | 標準偏差 | 0.009 |
| 部材名 | 正面長さ | 奥行き | ※隅の部材 | |
| Δ55 | 0.962 | | | |
| ΔX2 | 0.960 | | | |
| 平均 | 0.961 | | | |

図 3-2 床部材寸法表

2) 隅の柱間の短縮

ドリス式神殿のオーダーでは、トリグリフはフリーズ上に等間隔に配置されることが原則なので、そのため隅の柱間を短縮するということ (angle contraction)⁴⁾ が行われる。メッセネ内の同時期のドリス式神殿であるアスクレピオス神殿においても、隅の柱間が短縮されており⁵⁾、メッセネ神殿も同様に隅の柱間が短縮されたと考えられる。その短縮量は理論的にはアーキトレヴ幅の半分からトリグリフ幅の半分のひいたものとなる。もっともギリシアのドリス神殿の調査データは必ずしも理論どおりではないが、少なくとも短縮されているのは事実である。メッセネ神殿ではアーキトレヴは表裏2部材で構成されており、1部材の幅は平均で0.387 mであった。したがってアーキトレヴの全体幅は2倍の0.774 mと考えられる。これはアーキトレヴの上部に位置するフリーズ部材 (Δ 293) の幅が0.777 mであることから妥当な値と考えられる。(PLATE103)

トリグリフの正面長さは保存状態のよかった部材 Δ 279 を参照し復元寸法を求めた。その値は0.383 mであった。(PLATE102) トリグリフ正面長さはアーキトレヴ部材のレグラの長さと同様だが、この寸法値は他のアーキトレヴ部材のレグラとほぼ一致することから妥当な値といえる。⁶⁾

これらの値を使って、隅の柱間の短縮は理論値として

$$(0.774 - 0.383) / 2 = 0.1955 \text{ (m)} \text{ と計算される。}$$

つまり隅の柱間寸法は

$$1.920 - 0.1955 = 1.7245 \text{ (m)} \text{ となる。}$$

スタイロベート部材の正面幅は0.960 m、隅のスタイロベート部材は0.883 mなので、隅から2番目のスタイロベート部材の正面幅は、

$$1.7245 - (0.960/2 + 0.883/2) = 0.803 \text{ (m)} \text{ となる。}$$

3) クレピスの復元

神殿の正面幅を決定するにあたり、まずクレピス部材について分析する。クレピス部材はスタイロベートの下に位置する基壇部材でありドリス式では通常2段設置される。複数出土しているが、破損がひどく元の大きさが分かる物は少ない。残りのよい7個の部材を実測し、正面長さは約0.8mと約0.96mの2種類があることがわかった。この値は、スタイロベートの正面長さの値とほぼ一致しており、0.8 mの部材は隅から2番目に配置され、0.96 mの部材は通常のクレピスとして使われていたと推測できる。⁷⁾

また、上面の痕跡により、踏み面の幅を知ることができた。この値は、隅のクレピス部材であるΔ 50とΔ 59において、正面側と側面側の踏み面は同じ寸法であったことから、神殿の短手、長手での踏み面の寸法は同じであったとことがわかる。そこで上面の痕跡が残る6個の部材に関して数値の平均値を求め、復元寸法とした。値は0.253 mとなった。しかしながら、クレピス、スタイロベートには正面に2段の蹴上げ切り込みが施されているので、上面に比べ底面の奥行きが2 cm小さい。そのため2 cm引かれて見かけ上の踏み面は0.233 mとなる。クレピスは通常、2段置かれるので⁸⁾、 $0.233 \times 4 = 0.932$ (m) の長さを、スタイロベートでの神殿正面幅に足した値がクレピス下段での神殿正面幅となる。

4) 正面柱数の決定

ドリス式神殿において正面柱数は6本が一般的だが、7本、8本の事例もあり、⁹⁾この3種類について検討を行う。

前述したように、神殿の南側と北側には荒石による基礎がみられ、その内側が深さ50 cmほど掘り込まれている。通常の神殿の基礎の石材が切石であることを考えると、この荒石の部

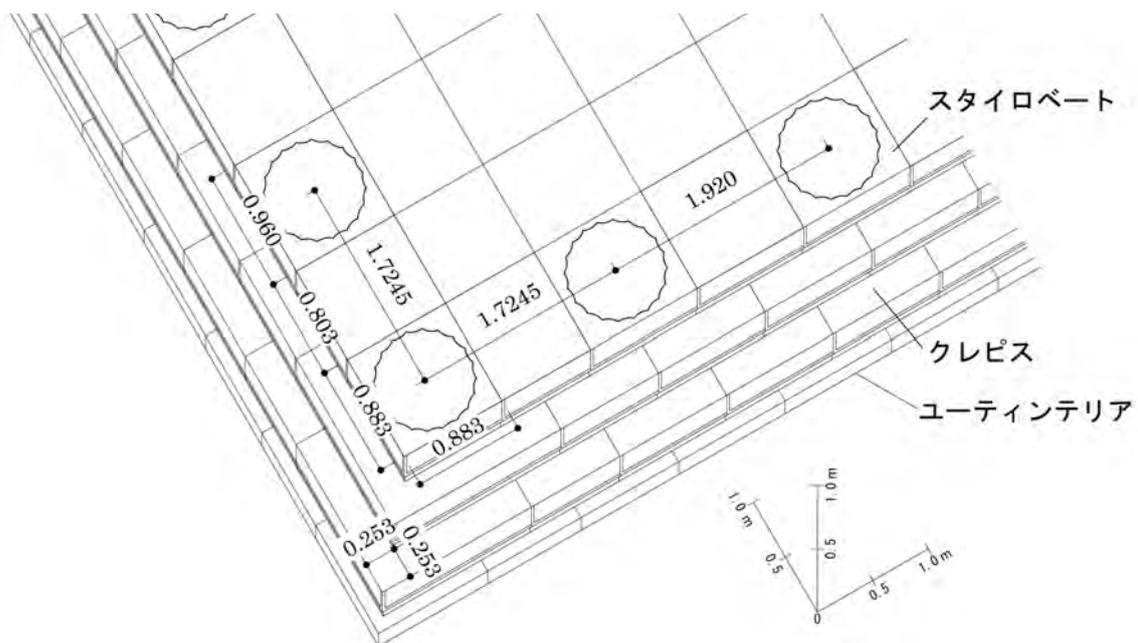


図 3-3 基壇隅詳細図

分が神殿の基礎であると考えerには無理がある。また、この荒石のライン上に碑文の台座が出土していること、神殿西側の階段の下にこれと同じ基礎が作られていることから、この荒石の基礎の上に非常に大きい重量をもつ神殿が配置されたと考えるにも無理がある。したがって、神殿はこの南北の荒石基礎の内側に位置していたと考える方が妥当である。実測では、南北の荒石基礎の内側の距離は 11.5 m であり、クレピスの位置での神殿正面幅はこれより小さくなる。

以上のような仮定の下、正面柱数が 6、7、8 本の場合を検討した。

・正面柱数 6 本の場合

正面に 6 本の場合スタイロベート部材が 11 枚配置される。そのうち 7 枚が通常のスタイロベート部材（正面幅 0.960 m）、2 枚が隅のスタイロベート部材（正面幅 0.883 m）、残りの 2 枚が隅からの 2 番目の短縮されたスタイロベート部材（正面幅 0.803 m）となるので、よってスタイロベート長さは

$$0.960 \times 7 + 0.883 \times 2 + 0.803 \times 2 = 10.092 \text{ (m)} < 11.5 \text{ (m)}$$

この値にクレピス 2 段分をたして

$$10.092 \text{ m} + 0.932 = 11.024 \text{ (m)} < 11.5 \text{ (m)}$$

これにより、正面 6 本の場合は条件にあてはまることがわかった。

・正面柱数 7 本の場合

正面に 7 本の柱が並ぶ場合スタイロベート部材が 13 枚となるので 6 本のとくと同様に計算を行うと、

$$0.960 \times 9 + 0.883 \times 2 + 0.803 \times 2 = 12.012 \text{ (m)} > 11.5 \text{ (m)}$$

これにより正面 7 本は当てはまらないことがわかる。

これらのことから、正面柱数は 7 本でも 8 本でもなく、6 本が妥当であると考えられる。

5) 側面柱数の決定

神殿の正面柱数は 6 本と決定することができた。ここで神殿の側面長さを決定する。そのためにまず周縁部の状況を分析を行った。神殿西側と東側には、基礎の部材と思われるポロスの基礎部材が出土している、東側のポロス部材はその真々距離がスタイロベート部材の長さとはほぼ同じであることから床材を載せるための基礎と考えられる。次に西側のポロス部材は東側のポロス部材とは違って、密着して配置されていることから、周柱や内陣の壁などが上部に配置された基礎だと考えられる。¹⁰⁾ さらに、東側には基礎のために地盤を切り込んだ部分が残っている。また西側には南側北側と同様の荒石の基礎が残っており、その内側の位置から東側の地盤の切り込みまでがおおよそその神殿の長さではないかと考えられる。その長さは実測によると 22.79 m であった。

また、トイコベート部材の外側側面には接触部分があり、ここにプテロンの床舗装部材が接合されていたと思われる。もしこの神殿がプロスタイルであるならばプテロンがなく床舗装部

材は必要がないため、トイコベートは外側面に露出され、接合面をつくる必要はない。つまりトイコベートの形状からは、外側にプテロンがあったとしか考えらず、この神殿は周柱式の神殿であったと考えられる。

そこで、22.79 mに近い値となる側面柱数を考えてみると、側面柱数が12本のときにスタイロベート長さは、

$$0.960 \times 19 + 0.883 \times 2 + 0.803 \times 2 = 21.612 \text{ (m)}$$

となる。この値にクレピス2段分の長さを足して

$$21.612 + 0.932 = 22.544 \text{ (m)} < 22.79 \text{ (m)}$$

となり、妥当な値を示すことがわかった。また、13本の場合は基礎の掘り込みの長さを超えてしまい、11本では値が小さすぎることがわかった。この結果、側面柱数は12本と決定した。

以上により、メッセネ神殿は正面に6本、側面に12本の柱を持つことが分かった。また、上記のような配置を行うと西側のポロスの基礎はスタイロベートの位置となり、東側のポロスは床材の載る位置になることが判明した。

6) 西側階段の復元

次に西側階段の分析を行う。西側階段は欠損部分が多く、踏み面等も場所によりさまざま、かなりのひずみや部材の配置のズレが生じている。また、階段のレベルの測定においては、北側に比べて、南側が約10cm低くなっていることがわかった。このことから西側階段は地形の変動や発掘の影響によって、部材の配置が当時の物とは変わってしまっていることがわかる。そのため、西側階段に関しては、数センチの誤差は生じるものとして復元を行う。

西側階段の最下段の基壇の長さは14.319 mである。基壇の踏み面はまちまちだが、北側で0.160 m～0.270 m、南側で0.200～0.270 m、西側で0.240～0.310 mであった。北側、南側は登るために作られていたような踏み面ではなく、上段になるにつれて踏み面は小さくなっているようであった。また、階段は前述した、神殿西側の端部に位置すると思われる荒石の基礎の境目の部分において途切れていることから、神殿の側面部には階段はなく、神殿の西側に突出部として階段部分が付属する形となると考えられる。

階段を復元するにあたって、階段及び、周縁部のレベル測定の値を用い、断面図を作成した。レベル測定の値によると、階段1段目を基準点0 m（絶対高327.550m）としたとき、現存する最上段つまり5段目の高さは、+0.810 m（絶対高328.360m）であった。また、神殿西側のポロスの基礎の高さは+0.744 m（絶対高328.294m）、東側のポロスの基礎の高さは+1.088 m（絶対高328.638m）であった。さらに東側には岩盤の掘り込みの端に敷かれている部材の高さが+1.623 m（絶対高329.173m）である。この部分は西側に比べ東側の地盤がずいぶん高くなっており、東側のこの部分が本来の神殿のグラウンドレベルだと考えられる。このことは、東側端部中央付近に見られる神殿入口の斜路の基礎の高さからからも妥当であることが伺えた。¹¹⁾

以上のことから、神殿は西側階段一段目に対して、1.623m高い位置に作られていたことが分かった。西側の階段が、東側のグラウンドレベルの高さまで到達していたとし、階段の復元を

2. 内陣の復元と考察

ここまでで、周柱の平面を復元することができた。次に、内陣部の復元を行う。内陣部の復元には、前述した、トイコベート部材、オルソスタット部材の分析から行う。

周柱式の神殿における内陣の平面形式は大きく分けて、プロナオスとナオスを持つタイプとこれらにオピストドモスが付加されるタイプの2種類に分けられる。本神殿の場合、アンタ用のトイコベート及びオルソスタット部材がそれぞれ4個出土していることからメッセネ神殿はナオス、プロナオス、オピストドモスの3室を持っていたことがわかる。

また、神殿の北東部には東側のプテロン(外周部)の床舗装部材を支えたと思われる基礎部材が出土しており、この部材の上にトイコベートが配置されるとは考えにくい。さらに、神殿の西側にも基礎部材が出土しており、形状からスタイロベートの基礎部材であったことがわかっている¹³⁾。これらのことから、内陣が配置される範囲は、最大で東側の床舗装部材の基礎部材の西端から西側のスタイロベート基礎部材の東端までの距離であり、その値は実測によると、17.137mであった。つまり、内陣の長さは17.137mよりも小さいとして復元を行う。

前章において、トイコベート部材、オルソスタット部材に関して、形状による分類を行い、以下の6種類に分類した。

- ・アンタ用
- ・交差部用
- ・ナオス側面壁用
- ・オピストドモス仕切り壁用
- ・プロナオス、オピストドモス側面壁用
- ・プロナオス仕切り壁用

これらの分類の元、トイコベート、オルソスタットの形状と、クランプ穴、ダボ穴の痕跡を分析し、部材の組み合わせを復元する。

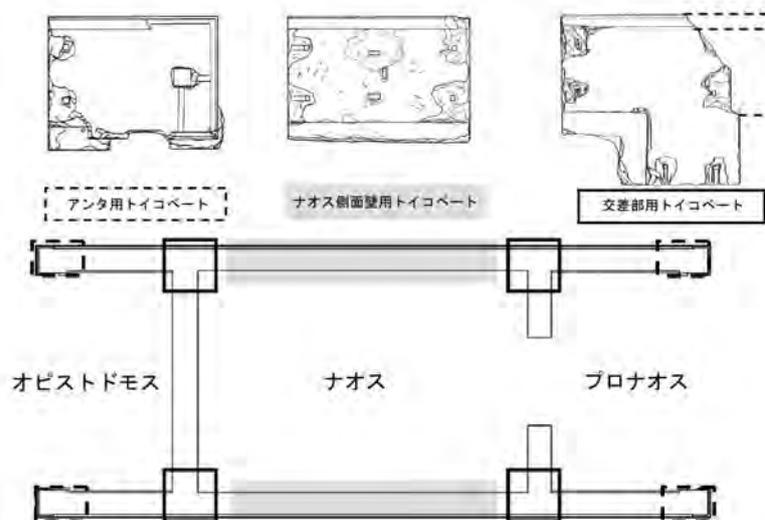


図 3-5 推測される内陣の形状

1) 敷居と周辺部材の復元

前述より、敷居1つの扉の幅は1.015mであり、扉の開口部は2.030m、敷居部材の全体長さは2.955mと推測できた。敷居部材の両端部の形状とプロナオス仕切り壁用トイコベート部材Δ11、Δ17の切り込みの位置と形状が対応することから、敷居部材はこれらの部材の端部に載る形で接合されたと考えられる。

さらに、オルソスタット部材Δ20には端部下部に大きな切り込みが見られ、この形状は敷居部材がプロナオス仕切り壁用トイコベート部材Δ17と重なる部分の形状に一致する。他にこのような形状が見られるオルソスタット部材は見られないため、オルソスタット部材Δ20はプロナオスの仕切り壁として、Δ17の上に配置されたと考えられる。

次に、Δ17の隣に配置されるトイコベート部材を考える。ここまでの考察で、メッセネ神殿は周柱式の神殿であることがわかっているため、神殿の幅から考えて、これ以上オルソスタットが置かれるとは考えられない、それゆえΔ17の隣に配置されるトイコベート部材は交差部用の部材であることがわかる。そこで、Δ17の隣に配置される部材はクランプ穴の位置、上面仕上げ面幅の値から交差部用トイコベート部材Δ140が妥当であると考えられた。このことはΔ20の切り込みからの部材長さが1.110mであり、この長さはΔ140の一端の長さとしてΔ17のオルソスタットが設置される部分の長さを合わせた1.109mにほぼ等しいことから妥当だと判断できる。同様に、反対側にも交差部用の部材が配置されるとすると、Δ11と対応する部材はクランプ穴の位置、上面仕上げ面幅の値からΔ3が妥当であると判断できた。ここまでの、プロナオスの内法長さは5.175mと推定できた。また、トイコベート部材Δ17の上面のL字型の仕上げ面の端は敷居部材の段差の位置に一致していることと、敷居部材の上面に見られるダボ穴の痕跡からオルソスタット部材Δ20は敷居内側を3個のダボで固定され、L字の形状をしていたと考えられた。上面の痕跡からΔ20のおおよその大きさが復元できた。部材の正面長さは1.460mで、敷居側の奥行きは0.793m、扉の立枠を支えるための壁の幅は0.425mであった。また、プロナオス仕切り壁の幅は0.486mであった。扉の立枠がどのような形をしていたのか、その詳細は不明であったが、上面の痕跡から敷居正面から敷居内側前面にかけてを覆う部材と敷居内側中間部分を覆う部材、敷居内側後方から背面を覆う部材の3つによって構成していたと考えられた。

ここまでの敷居とその周辺の部材の配置を決定することができた。さらに、2個の交差部用のトイコベート部材の配置が決定したことで、残りの2個の部材の位置も特定することができ、オピストモス仕切り壁との交差部に配置されたことがわかる。形状から、Δ9は北西に、Δ145は南西に配置される。



図 3-6 敷居とプロナオス仕切り壁（復元）を東より見る

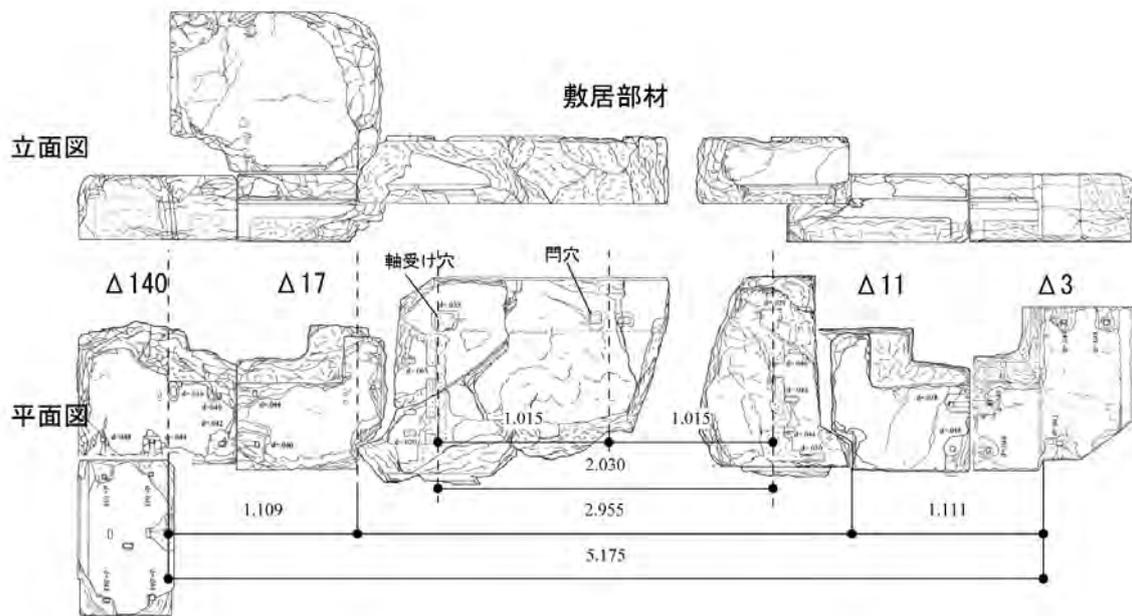


図 3-7 敷居及びプロナオス仕切り壁復元図

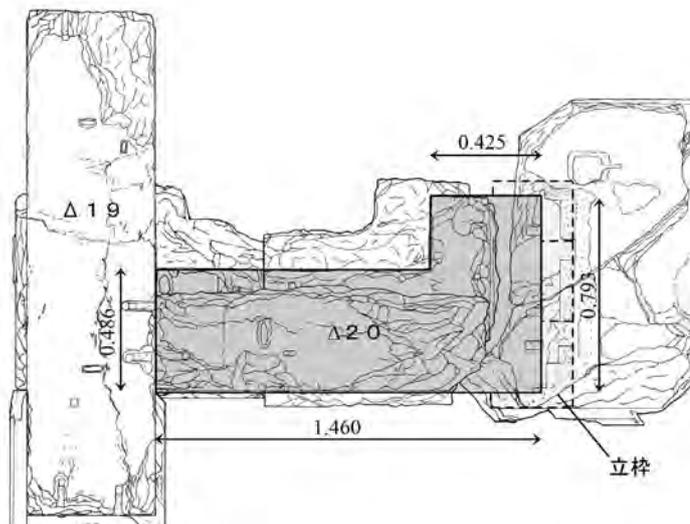


図 3-8 敷居とプロナオス仕切り壁用オルソスタット部材△20 復元図

2) アンタの部材の復元

出土したアンタ用のトイコベート部材4個のうち2個の部材には内側面に扉もしくは柵を設置するためと思われる切り込みが施されており、このことからプロナオス、オピストドモスのどちらか一方には扉や柵が設置されていたことがわかる。部材の形状からはどちらに扉が設けられていたのかを判断することができなかったが、切り込みのあるアンタ用トイコベート部材 $\Delta 47$ や同様の切り込みの施されているプロナオス及びオピストドモスのスタイロベート部材 $\Delta 117+$ $\Delta 118$ が神殿の南東部に出土したことからオピストドモスではなく、プロナオスに扉が設けられていた可能性が高い。そこで、本神殿ではプロナオスの入口に扉が設けられていたとして復元を行う。これにより、アンタ用のトイコベート部材は北東に $\Delta 349$ 、南東に $\Delta 47$ 、北西に $\Delta 577+580$ 、南西に $\Delta 223$ が配置されることがわかる。

次に、アンタのオルソスタットについて考える。アンタ用のオルソスタット部材は端部が角柱となっており、その角柱部の一方の側面は幅約30cm、もう一方の幅は約60cmとなっており、角柱の幅は側面によって異なる。アンタのトイコベート部材の上面仕上げの形状から、角柱の幅が広い側(60cmの方)が内側となることが分かるため、アンタのオルソスタット部材の内 $\Delta 4+$ $\Delta 568+$ $\Delta 574+$ $\Delta X4$ と $\Delta 22$ は南東もしくは北西に配置、 $\Delta 6$ と $\Delta 40+45$ は北東もしくは南西に配置されることがわかる。これらを考慮したうえで、各部材のダボ穴の位置から分析すると、南東のアンタのトイコベート部材 $\Delta 47$ の上面のダボ穴に対応する、オルソスタット部材は $\Delta 22$ しか当てはまらないことがわかった。これにより、アンタのオルソスタット部座は北東に $\Delta 40+45$ 、南東に $\Delta 22$ 、北西に $\Delta 4+$ $\Delta 568+$ $\Delta 574+$ $\Delta X4$ が配置されたことがわかった。

3) プロナオス及びオピストドモス側面壁の復元

前項でアンタの部材の配置は決定した。次に、プロナオス及びオピストドモス側面壁の復元に関連するトイコベート部材 $\Delta 21$ 、 $\Delta 220$ 、 $\Delta 131$ の3個の部材の配置を決定する。プロナオス及びオピストドモス側面壁用のトイコベート部材 $\Delta 21$ と $\Delta 220$ は角が45度に切り込まれており、その形状から交差部用のトイコベート部材に接合することは明らかである。形状とクランプ穴の位置から判断すると $\Delta 21$ は $\Delta 140$ に、 $\Delta 220$ は $\Delta 145$ に接合することがわかった。

さらに、トイコベート部材 $\Delta 131$ は、上面にアンタ用のトイコベート部材、オルソスタット部材に見られるものと同様の正方形のダボ穴があるため、アンタ用の部材に連結するはずである。また、 $\Delta 131$ の正方形のダボ穴は部材中央よりもやや内側に施されており、このダボ穴に対応するオルソスタット部材は $\Delta 22$ 以外には該当しなかった。¹⁴⁾したがって、 $\Delta 131$ は $\Delta 22$ の下に配置されるアンタ用トイコベート部材 $\Delta 47$ と接合することがわかった。

次に、交差部用のオルソスタット部材 $\Delta 19$ 、 $\Delta 144$ の配置を考える。オルソスタット $\Delta 19$ は部材の中央側面にアナシロシスがあることから、交差部用のトイコベート部材をまたぐように配置されたことがわかるため、上面にダボ穴がある交差部部材 $\Delta 9$ 、 $\Delta 145$ の上に載るとは考えられない。また、アナシロシスを境にして、下部に深目地が施されている。この

深目地はアンタのオルソスタットにも見られることから、この深目地が見られる方がプロナオスもしくはオピストドモス側であることがわかる。以上のことから $\Delta 19$ は、交差部用トイコベート部材 $\Delta 140$ の上に置かれたことがわかった。

オルソスタット $\Delta 144$ は側面端部に交差部のアナシロシスが見られ、部材下部には深目地が見られる。また、このアナシロシスの下部にはダボ穴が施されており、これに対応するダボ穴があるトイコベート部材は $\Delta 145$ のみである。以上のことから $\Delta 144$ は交差部用トイコベート部材 $\Delta 145$ の上に置かれたことがわかった。

これらの部材の配置を基準として、他の部材の配置、各部寸法を決定していく。

a. プロナオス側面壁の長さの決定

プロナオス側面壁を構成する部材が多く現存している神殿南東部に注目し、長さの推定を行う。ここまでの分析で、南東のプロナオス側面壁には、トイコベート部材では $\Delta 47$ 、 $\Delta 131$ 、 $\Delta 21$ 、 $\Delta 140$ が使われ、オルソスタット部材では $\Delta 22$ と $\Delta 19$ が使われていることが分かっている。次に、 $\Delta 21$ と $\Delta 131$ の間にいくつの部材が接合されるかを考える。前述したオルソスタットとの配置関係からトイコベート部材は上面にダボ穴を持つものと持たないものが交互に配置されていなければならない。¹⁵⁾ 仮に $\Delta 21$ と $\Delta 131$ の上部に位置するオルソスタット部材 $\Delta 22$ と $\Delta 19$ の間に2個のオルソスタット部材が配置されるとするならば、下部のトイコベート部材はさらに3個が配置されなければならない。この場合、後述するオピストドモス、ナオスの長さから考えにくい¹⁶⁾。したがって、この部材間には1個のオルソスタット部材が配置され、トイコベート部材 $\Delta 21$ 、 $\Delta 131$ の間には1個のトイコベート部材が配置されるのが自然である。上面にダボ穴の無い形状から間に $\Delta 243$ もしくは $\Delta X8$ が配置されることが考えられたが、クランプ穴の位置から $\Delta X8$ が妥当であることがわかった。したがって、 $\Delta 243$ は反対側（北東側）の同位置にあたる部材だと考え配置を行なった。この結果、南東部のトイコベート部材はすべてそろったことになり、プロナオスの側面壁の長さは3.781 mと決定した。

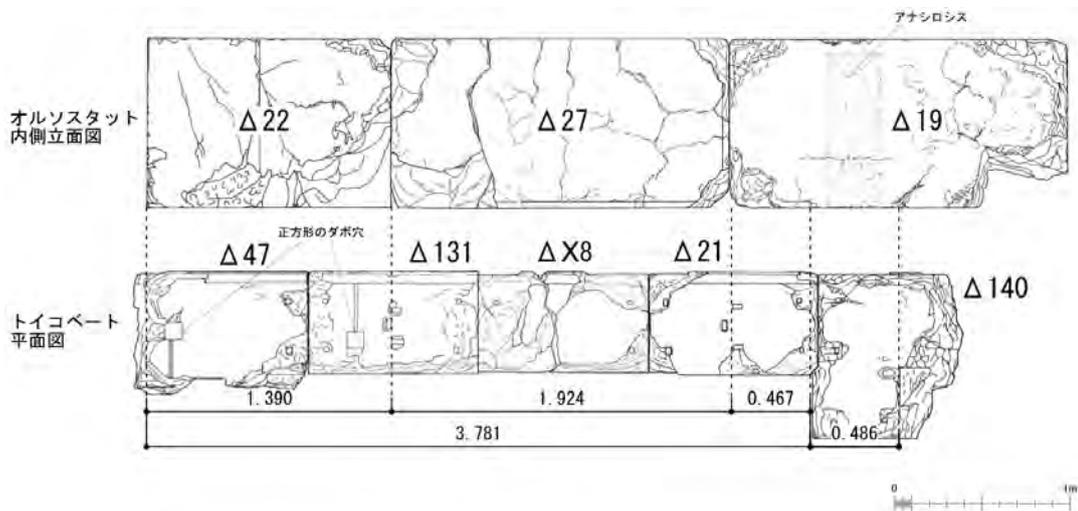


図3-9 神殿南東部 プロナオス側面壁復元図



図3-10 南東プロナオス側面壁（復元）を南東から見る

また、プロナオス及びオピストドモス側面壁用オルソスタット部材 Δ 27はその長さでクランプ穴の位置から、 Δ 19と Δ 22の間に配置され、トイコベート部材 Δ 21と Δ 131、 Δ X8の上に配置されることがわかった。

b. オピストドモス側面壁の長さの決定

オピストドモス側面壁を構成する部材が多く現存している神殿南西部に注目し、長さを決定する。オルソスタット部材 Δ 6と Δ 144が配置されることは前述から明らかなので、その長さから Δ 220と Δ 223は直接接合せず、間にいくつかの部材が配置されるはずである。プロナオスの復元と同様に仮にオルソスタット部材がもう1枚配置されると考えるならば間にはさらに3個のトイコベート部材が必要であり、これは後述する神殿の長さから考えにくい¹⁷⁾。よって間に1個のトイコベート部材が配置されたと考えられる。このことからオルソスタット部材 Δ 6と Δ 144は隣接することがわかった。 Δ 220と Δ 223の間に配置されるトイコベート部材は、 Δ 49が妥当であると考えられる。 Δ 49の上面にはアンタ用のトイコベート部材と隣接する Δ 131と同様に、ダボに鉛を流し込むための溝の一部が残っており、アンタの部材と隣接したことは明白である。また、 Δ 49の上面には Δ 131のようなてこ穴とダボ穴の組みは見られないが、この位置に配置されるとするならば、オルソスタット Δ 144はトイコベート部材 Δ 145とのダボによって固定されるため、 Δ 49にダボ穴が必要ない事がわかる。これにより、 Δ 49の位置が確定した。オルソスタット部材 Δ 144と Δ 6の長さからこのときの Δ 220と Δ 223の間の距離は0.960mとなりトイコベート部材1個が配置されることに妥当な値を示していることがわかる。以上のことから、オピストドモス側面壁の長さは、現存のオルソスタット部材の長さから2.807mとなった。(図3-13)

4) ナオス側面壁の復元

ナオスの側面壁用のトイコベート部材は9個出土しているが、部材ごとの位置を特定する手がかりが乏しく、その位置を断定することは難しかった。そこで、ダボ穴とてこ穴に注目し、



図3-11 南西オピストドモス側面壁（復元）を南から見る

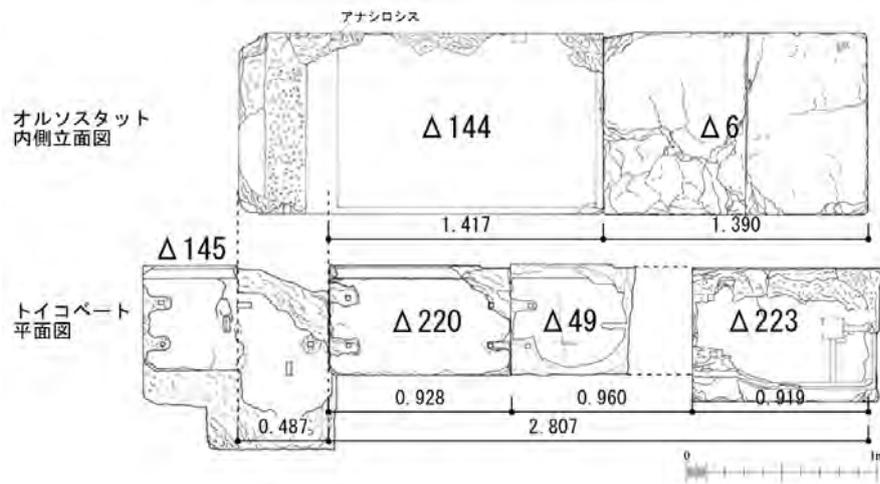


図3-12 神殿南西部 オピストドモス側面壁復元図

部材の配置の順番から、トイコベート部材の位置の特定を試みる。これまでに位置が確定した部材の施工痕から、オピストドモス側面壁、プロナオス側面壁、のオルソスタット部材はそれぞれ西から東へと積まれていったことは明白である。¹⁸⁾ このことから、ナオスの側面壁も同様に西から東へと配置されたと考えるのが自然である。よって、ナオス側面壁用トイコベート部材は他の側面壁用トイコベート部材と同様に上面のダボ穴に対しててこ穴が東側に位置していなければならない。つまりΔ 8、Δ 16は北側に、Δ 48、Δ 143は南側に配置されることがわかった。ここまでで、南北それぞれに上面にダボ穴を持つトイコベート部材が2個ずつ配置されることがわかったことと、その他の部材が5つ出土していることから交差部のオルソスタット部材を除き、ナオス側面壁には少なくとも3枚のオルソスタット部材が配置されたことは明らかである。神殿南側に注目して検討する。

次に、仮にΔ 144とΔ 19の間にオルソスタット部材が4個配置されたとして考えてみると、西側のアンタのオルソスタットの端部から西側の外部円柱までの距離が約1mしかないことになる。この数値はあまりにも短く、本神殿では西側に階段が設けられており西側からのアプローチが考えられていることから該当しないといえる。

以上のことからΔ 144、Δ 19の間には3枚のオルソスタット部材が配置されたとして復元

を行うこととする。これまでのことを踏まえ、トイコベート部材の配置を検討する。
トイコベート部材の底面のダボ穴に注目する。トイコベート部材は接合面の端にダボ穴が設けられていることから、ダボ穴がある辺どうしが隣り合うことはない。また、交差部のトイコベート部材の4個の底面のダボ穴はすべて中央に向かってつけられているため、ナオス側面壁のトイコベート部材は南北とも、東西両方から設置されていき、どこかで1個の部材が落とし込まれて完成したことがわかる。ここまでの、上面にダボ穴があるトイコベート部材は北と南に振り分けられた。トイコベート部材は、上面にダボ穴があるもとないものが交互に配置されなければならないため、南北それぞれに3個ずつ、計6個のダボ穴付きトイコベートが配置されたことになる。(どちらも1つの部材が見つかっていない。)

ここで説明上、この6個のトイコベート部材の位置を北左(北側西の部材)、北中(北側中央の部材)、北右(北側東の部材)、南左(南側西の部材)、南中(南側中央の部材)、南右(南側東の部材)とする。北側に振り分けた $\Delta 8$ 、 $\Delta 16$ は底面のダボ穴が東側に向かって設けられているため、交差部の $\Delta 3$ とは接合せず、北右に配置されるトイコベート部材は見つかっていないことがわかる。また、南側に振り分けた部材の底面のダボ穴を見てみると、 $\Delta 143$ は東側に、 $\Delta 48$ は西側にダボ穴が設けられている。このことから、 $\Delta 48$ は $\Delta 143$ よりも西側に配置されなければならないことがわかった。

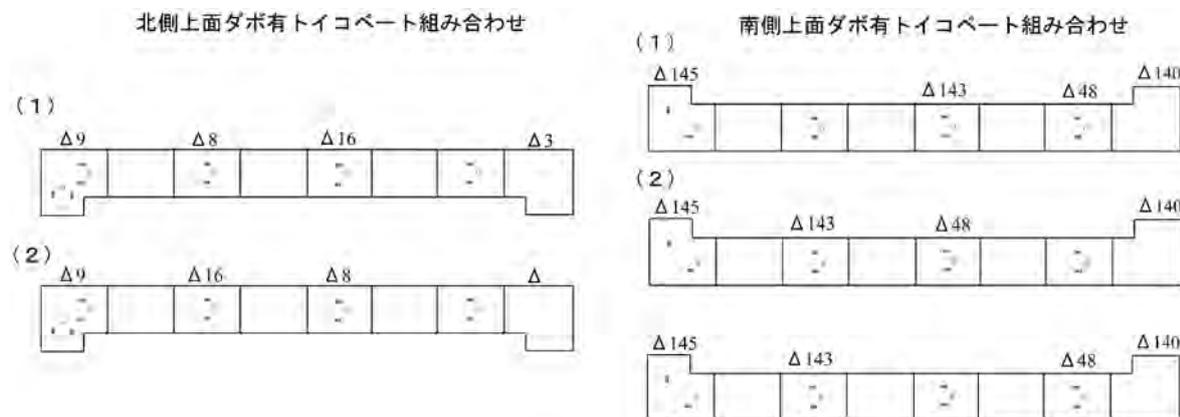


図 3-13 ナオス側面壁トイコベート配置パターン

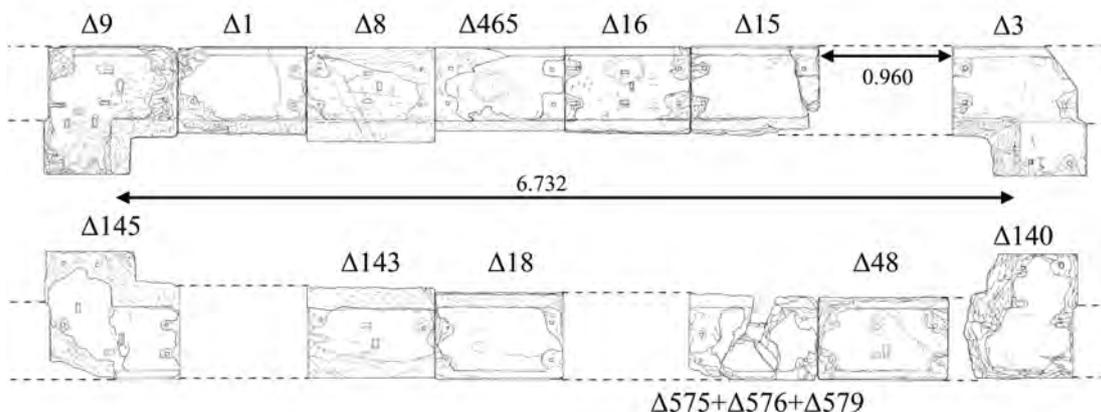


図 3-14 ナオス側面壁トイコベート復元図

これらの条件のもとに、ダボ穴付きのトイコベート部材の配置のパターンをあげると、北側では北左に $\Delta 8$ 、北中に $\Delta 16$ の場合と北左に $\Delta 16$ 、北中に $\Delta 8$ の2通りである。また、南側では南中に $\Delta 143$ 、南右に $\Delta 48$ の場合と南左に $\Delta 148$ 、南中に $\Delta 48$ の場合、南左に $\Delta 143$ 、南穂着に $\Delta 48$ の場合の3通りであった。南北の組み合わせで計6パターンの配置を考え、残りのトイコベート部材を、底面のダボ穴、クランプの位置、割れの形状などから妥当な配置を検討した。その結果、北側のトイコベートは西から $\Delta 1$ 、 $\Delta 8$ 、 $\Delta 465$ 、 $\Delta 16$ 、 $\Delta 15$ 、なし、南側のトイコベートは西から、なし、 $\Delta 143$ 、 $\Delta 18$ 、なし、 $\Delta 575 + \Delta 576 + \Delta 579$ 、 $\Delta 48$ と決定した。

以上で、現存するナオス側面壁のトイコベートの配置が完了した。しかしながら、すべての部材が出土しているわけではないため、部材の組み合わせだけでは、ナオス側面壁の元の長さを知ることができなかった。そこで、1個の部材以外がそろっている北側トイコベートの長さ、ナオス側面壁用トイコベート部材1個の長さの平均値、つまり0.960 mをたして、復元を行った。その結果、ナオス側面壁の長さは6.732mと推定できた。¹⁹⁾

5) オピストドモス仕切り壁の復元

オピストドモス仕切り壁の長さはプロナオス仕切り壁と同じとして5.175mとした。オピストドモス仕切り壁用のトイコベート部材は3個出土している。他のトイコベート部材と比べ、やや短くつくられており、その長さの平均値は0.859mであった。この数値から5個のトイコベート部材と3枚のオルソスタット部材が配置されたと考えられた。²⁰⁾ ナオス側面壁と同様に部材ごとの位置を特定する手がかりが乏しいが、クランプ穴の位置、底面のダボ穴の位置から、各部材の配置を行い、北側から $\Delta 2$ 、 $\Delta 169$ 、 $\Delta 14$ が隣り合って配置されるとした。また、部材の長さからオルソスタット部材 $\Delta 7$ はオピストドモス仕切り壁として使われていたものだと考えることができ、3枚のうち一枚だと考えられる。正確な場所までを特定することはできなかったが、トイコベート部材の上面のダボ穴の距離が $\Delta 7$ の長さとおおよそ一致することから北側に配置を行った。

ここまでで、トイコベート及びオルソスタット部材の配置が決定した。内陣の大きさは幅6.149 m、長さは14.289 mであった。内陣の壁の内法幅は5.175 mであり、この値は、3室とも同じであった。プロナオス、ナオス、オピストドモスの奥行きはそれぞれ3.777 m、6.732 m、2.807 mであった。トイコベート部材は建設当時、合計で37個使われていたが、現存する部材は28個であった。また、オルソスタット部材は21個使われていたが、9個の部材しか残っていない。

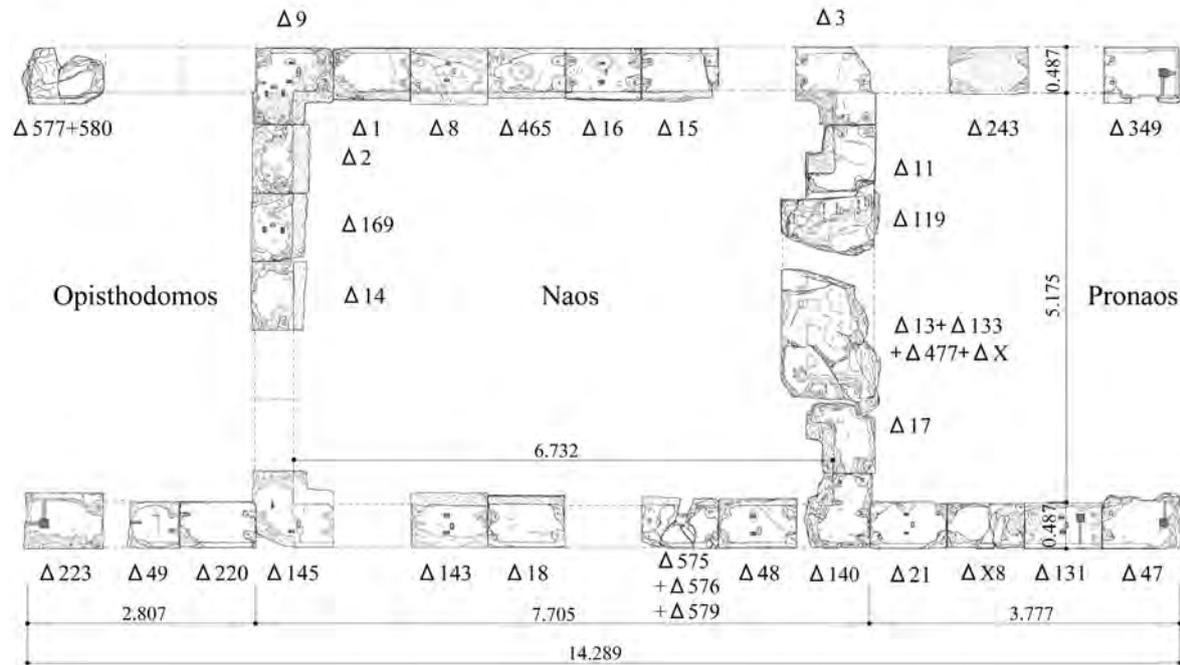


図 3-15 トイコベート部材配置図



図 3-16 オルソスタット部材配置図

6) 壁ブロック部材の復元

次に、オルソスタットのの上に設置される壁ブロック部材の復元を行う。壁ブロック部材は、完全な形で残っているものではなく、部材の元の長さは不明である。しかしながら、オルソスタット部材の上面に残るダボ穴の痕跡から部材のおおよその長さ、部材がどのように接合されたのかを推定することができた。壁ブロック部材には、上面の接合面側端部に1つずつのクランプ穴が残っており、1つのクランプによって隣の部材と接合していたことがわかる。また、底面には一方の接合面側端部に1つのダボ穴が残っており、このダボ穴はオルソスタット部材の上面にも見られたことから、オルソスタット部材と壁ブロック部材は、一方の端部を1つのダボで固定することで接合されていたことがわかった。さらに、オルソスタットの上面に見られる、ダボ穴とてこ穴の位置から、上面に載った壁ブロック部材の長さを推測すると角柱部分で0.880～0.884m、側面壁の部分では0.955～0.981m、オピストドモス仕切り壁では0.853mであった。ダボ穴の痕跡から得た数値であるので、数センチの誤差はあると考えられるが、壁ブロック部材は、下部に配置されたトイコベート部材とほぼ同じ長さでつくられていることがわかる。

つまり、壁ブロック部材の長さは側面壁では約0.96m、オピストドモス仕切り壁では約0.86m、角柱部分では約0.88mのブロックが使われていることがわかった。また、プロナオス仕切り壁用のオルソスタット部材の上面の痕跡から、仕切り壁が側面壁と接する部分は0.495mの小さなブロック部材が使われることがわかった。これは、交差部用トイコベート部材のL字の突出部の長さと同じ値を示している。交差部のオルソスタット部材であるΔ144

壁ブロック部材推定寸法 (m)

| 参照部材 | ブロック部材長さ | 備考 |
|------------------|----------|-------------|
| Δ6 | 0.884 | アンタ |
| Δ6~Δ144 | 0.967 | 側面壁 |
| Δ144~ | 0.482 | 側面壁 |
| ~Δ19 | 0.500 | 側面壁 |
| Δ19 | 0.981 | 側面壁 |
| Δ19~ | 0.447 | 側面壁 |
| Δ27~Δ22 | 0.967 | 側面壁 |
| Δ22 | 0.880 | アンタ |
| Δ4+Δ568+Δ574+ΔX~ | 0.480 | 側面壁 |
| ~Δ7 | 0.437 | オピストドモス仕切り壁 |
| Δ7 | 0.853 | オピストドモス仕切り壁 |
| Δ7~ | 0.418 | オピストドモス仕切り壁 |
| Δ20 | 0.495 | プロナオス仕切り壁 |

図3-17 オルソスタット部材から見る壁ブロック部材長さ推定表

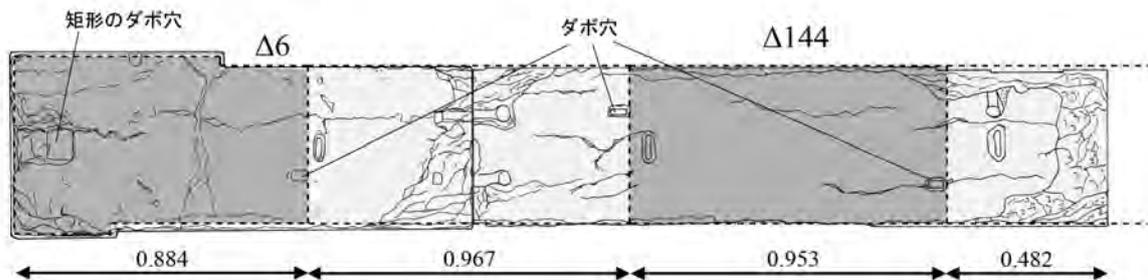


図3-18 南西部オピストドモス側面壁壁ブロック部材配置

の上面を見ても、オピストモス仕切り壁のブロック部材はナオス側面壁の位置までは突き出して来ない事は明白なため、オピストモスの仕切り壁のにも同様に、交差部との接合面には小さな壁ブロック部材が使われたと考えられる。

さらに、壁ブロック部材の上面に注目する。壁ブロック部材 $\Delta 105 + \Delta 105 \alpha$ の上面には、てこ穴とダボ穴が残っている。このダボ穴から部材の接合面端部までの長さは 0.476m であった。この値は、側面壁の壁ブロック部材の長さのおおよそ半分の長さになっていることから、壁ブロック部材は、下段の石材の中央に上段の石材の端部が来るように互い違いに配置されたことがわかる。

7) 部材配置の順序

ここまでで、内陣を構成する部材であるトイコベート、オルソスタット、壁ブロック部材の復元を行った。次に、これらの部材がどのような順で配置されていったのか、検討を行う。

a. トイコベート部材の配置順

トイコベート部材の配置順を検討するにあたり、部材底面のダボ穴に注目する。交差部の部材に注目すると、これらの部材はナオス側、仕切り壁側両方にダボ穴が設けられていたことがわかる。このことから、これらの部材は仕切り壁、ナオス側面壁の部材よりも先に配置されたことがわかる。さらに、プロナオス、オピストモス側面壁の部材に注目すると、これらの部材の底面のダボ穴はすべてナオス側に向かってつけられている。このことから、プロナオス、オピストモス側面壁の部材は外側からナオス側に向かって配置され、その後に交差部の部材が配置されたことがわかった。

次に、ナオス側面壁、オピストモス仕切り壁について、注目する。ここまでで、交差部部材がナオス側面壁、オピストモス仕切り壁よりも先に配置されたことは述べているため、これらの部材は、交差部部材から内側に向かって配置されて行き、最後は落とし込みの部材によって閉じられたことがわかる。オピストモス仕切り壁用のトイコベート部材 $\Delta 14$ は底面にダボ穴が見られないことから、落とし込み部材であると考えられる。つまり、オピストモス仕切り壁のトイコベートは南北両側から設置されて行き、中央の部材が最後に落とし込まれ完成した。ナオス側面壁も同様に、東西両側から部材が配置され、北側、南側それぞれに 1 つずつの落とし込み部材が配置されたことがわかる。しかし、落とし込み部材の位置を特定するには至らなかった。これまでに配置が決定したトイコベート部材から考えると、北側では東側から 1 番目もしくは 2 番目、南側では東側から 2 番目もしくは 3 番目の部材が落とし込み部材であると推測できる。²¹⁾

b. オルソスタット部材の配置順

オルソスタット部材の配置順を検討するにあたり、トイコベート部材の上面のダボ穴とてこ穴に注目する。プロナオス、ナオス、オピストモスの側面壁の部材の上面に注目すると、てこ穴がダボ穴に対して東側に位置していることがわかる。このことは、オルソスタット部材が

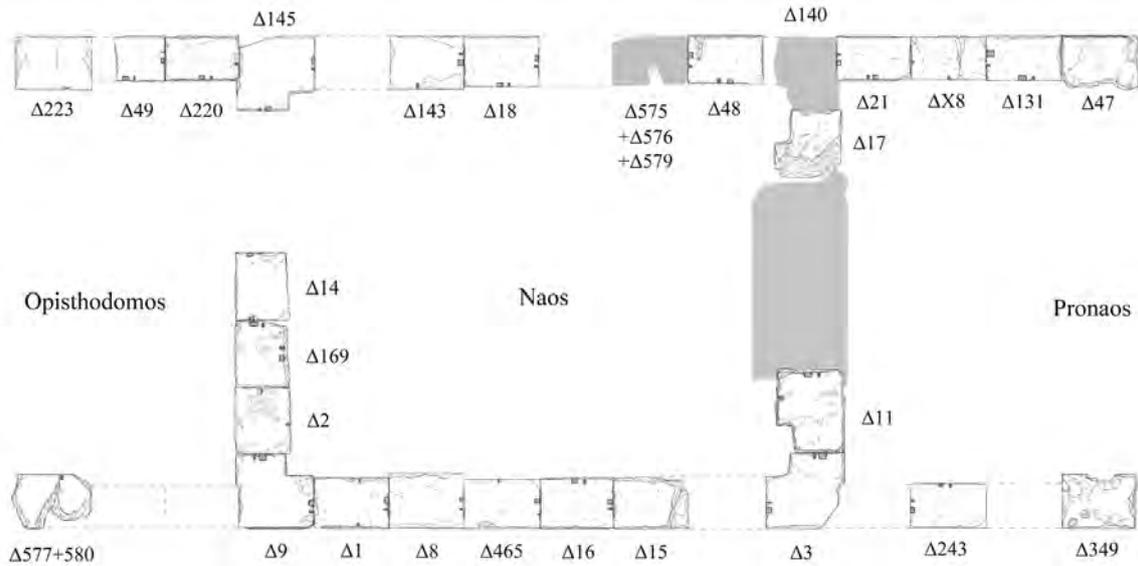


図 3-19 トイコバート配置底面見上げ図

西から東へと配置されていったことを意味する。さらに詳しい順序を特定するために各交差部材に注目する。南西の交差部材 $\Delta 145$ は北側、東側の 2 方向にダボ穴が設けられており、上部のオルソスタット部材 $\Delta 144$ は、2 方向から固定されたことがわかる。このことから、 $\Delta 144$ は隣接するナオス側面壁、オピストドモス仕切り壁のオルソスタットよりも先に配置されなければならない。さらに、北西の交差部材 $\Delta 9$ の上面のオピストドモス仕切り壁と側面壁の接点部分にはてこ穴とダボ穴が見られる。これは、オピストドモス仕切り壁が設置された後に、北側の側面壁が配置されたことを意味する。次に、南東の交差部材を見てみると、側面壁とプロナオス仕切り壁との接点部分にはてこ穴が設けられている。このことからプロナオス仕切り壁部材 $\Delta 20$ は側面壁部材 $\Delta 19$ よりも先に配置されたことが分かる。北東の交差部材 $\Delta 3$ の上面にはそのようなてこ穴が見られないため、北側のプロナオス仕切り壁は北側の側面壁が設置された後、落とし込まれたと考えられた。

c. 壁ブロック部材の配置順

壁ブロック部材の配置順を検討するにあたり、オルソスタット部材の上面のダボ穴とてこ穴に注目する。アンタのオルソスタット部材に注目すると、ダボ穴に対しててこ穴がナオスの方向に向かうように設けられている。これはアンタの部材が先に設置され、ナオス側に向かって壁ブロック部材が配置されていったことを意味する。つまり、側面壁の壁ブロック部材は東西から積まれていき、最終的に落とし込み部材によって完成したことがわかる。また、オピストドモス仕切り壁の部材を見ると、てこ穴は北方向に向かって設置されていることが分かる。このことから、オピストドモス仕切り壁の壁ブロック部材は南から北に配置され、こちらも最後は落とし込まれたと考えることができた。現存するオルソスタット部材の数が少ないため、部材がどこで落とし込まれたのかを明らかにすることはできなかった。次にプロナオス仕切り壁を見てみるとてこ穴が南側に設けられていることから敷居側のブロックを配置した後、交差部に接するブロックが落とし込まれたことがわかった。

8) プロナオス入口の復元

次に、プロナオスの入口の敷居に関する復元を行う。プロナオス入口端に位置する、アンタ用のトイロベート部材 $\Delta 47$ 、 $\Delta 349$ の内側側面には扉、もしくは柵を設けるための特殊な形状の切り込みが施されていた。スタイロベート部材 $\Delta 117 + \Delta 118$ には同様に側面に切り込みが見られ、プロナオス入口の柱を支えたスタイロベート部材であったことがわかる。この部材は円柱を載せる部分のみ0.177m高くなっており、その寸法は1辺は約0.7mの正方形であった。側面の切り込みはこの部分にまで渡っており、約0.07m内側に切り込まれていた。 $\Delta 572$ 、 $\Delta X6$ はこれらの切り込みに対応する形状をしており、互いに接合されることは明白でありプロナオスの敷居に用いられたことが分かる。さらに、 $\Delta 130$ は床材やスタイロベート部材と同じ正面幅かつ同じ高さである部材であり、 $\Delta 117 + \Delta 118$ と同様に、上面に一段高い段差が設けられていた痕跡が残っている。これらの理由からプロナオスの敷居に使われていたと考えた。これらの部材を用い復元を行う。

特に北東側のアンタに注目して復元を行う。 $\Delta 349$ と $\Delta 117 + \Delta 118$ の切り込みの位置を対応して配置させると、プロナオス内側での部材端の位置が一致し、さらに $\Delta 117 + \Delta 118$ の立ち上がりのプロナオス内側のラインとプロナオス外側のラインがそれぞれ $\Delta 349$ の角柱部の始まりのラインと部材先端のラインに一致することから互いに対応して作られた部材であることがわかる。次に、浅い切り込みの形状から $\Delta X6$ と $\Delta 349$ が接合、深い切り込みの形状から $\Delta 572$ と $\Delta 117 + \Delta 118$ が接合されることが推測できる。しかしそのまま接合されると、それぞれに重なる部分が生じうまく接合できない。これを解消するために、 $\Delta 572$ と $\Delta X6$ には切り込みが施されていた。(図3-20)さらに、 $\Delta 130$ がもともと $\Delta 572$ 、 $\Delta X6$ と同じ部材(図3-21)であったと考えると、すべての部材がうまく収まった。この敷居部材の高さは0.446mとなり、前面の段差付き仕上げ面の上端が $\Delta 117 + \Delta 118$ の柱のための立ち上がりの高さと一致する。このことから、 $\Delta 117 + \Delta 118$ の前面にも段差付き仕上げ面が施されていたと考えられた。結果的に、敷居の床材からの相対高さは0.231mとなり、柱の立ち上がり部分よりも約6cm高くなっていることがわかった。(図3-22)また、柱の立ち上がり部分は切り込みによって大きく削られ、上面の幅は55cmほどしかない。内部柱の円柱ド

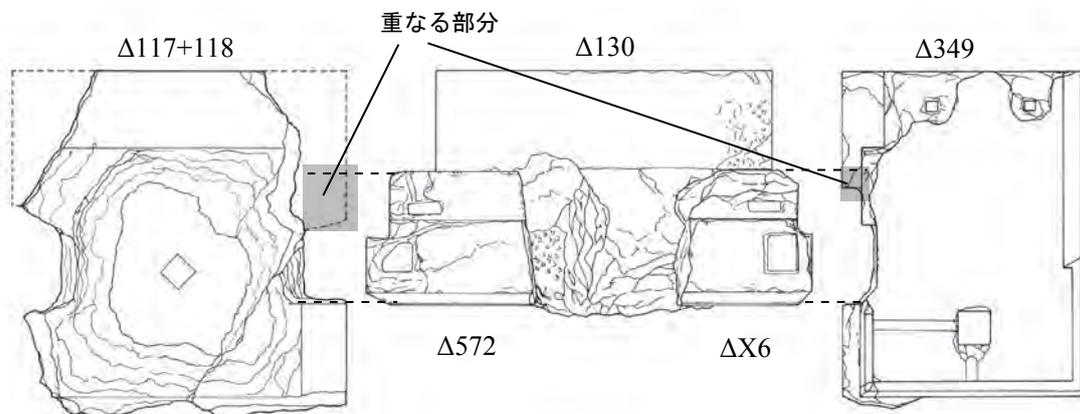


図3-20 プロナオス入口敷居の復元使用部材と部材の収まり



図 3-21 プロナオス敷居のスタイロベート Δ 130



図 3-22 プロナオス敷居部材 Δ X6

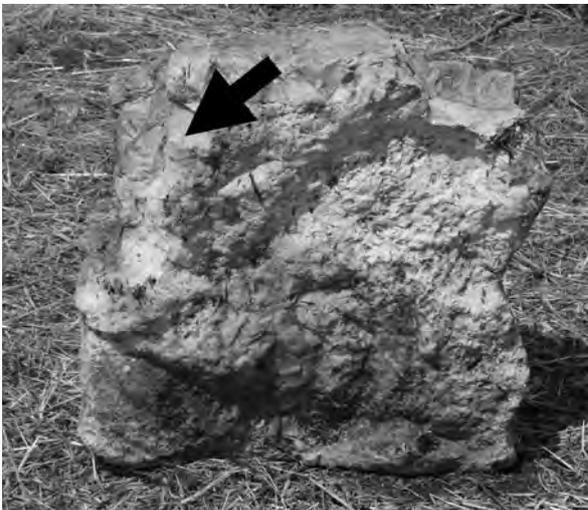


図 3-23 プロナオス敷居の底面の切り込み 左 Δ X 6 右 Δ 572

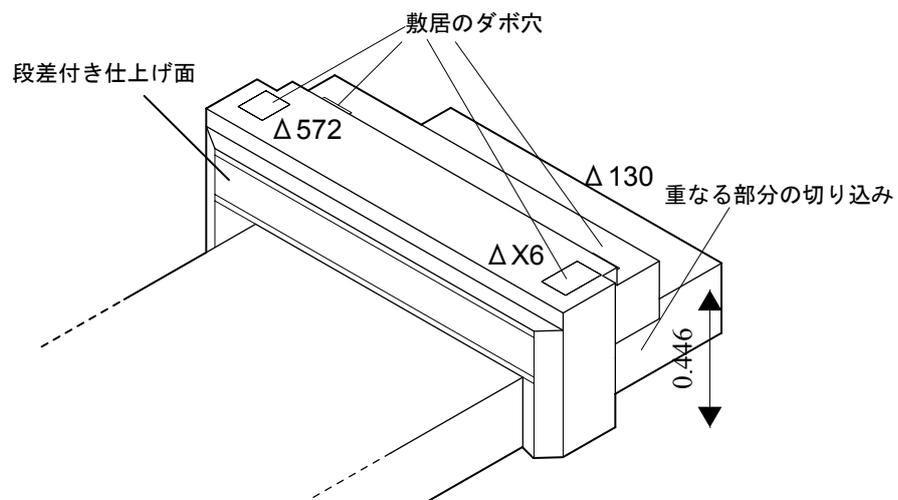


図 3-24 プロナオス敷居部材復元図

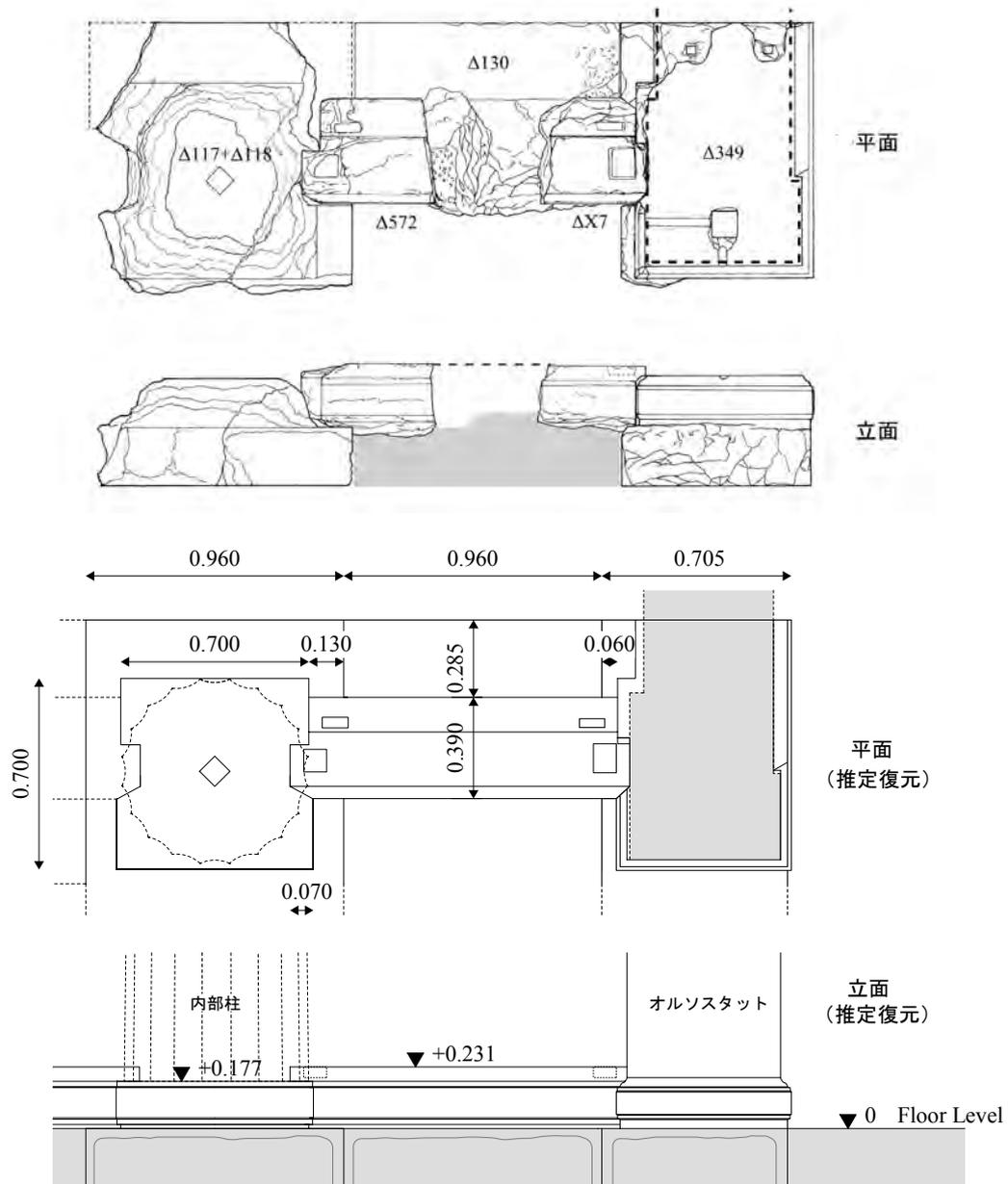


図 3-25 プロナオス敷居復元図

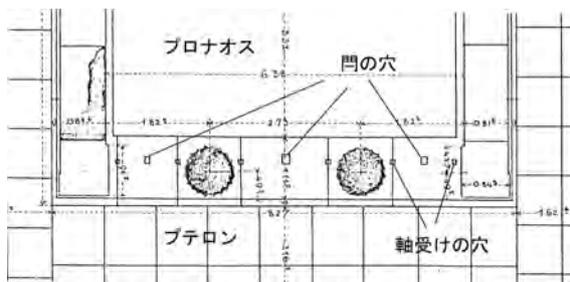


図 3-26 エギナのアファイア神殿の敷居

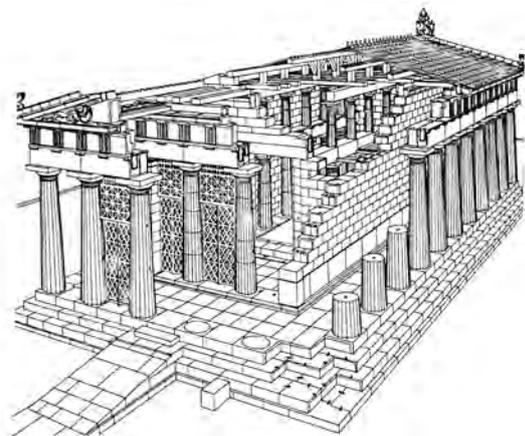


図 3-27 エギナのアファイア神殿パース

ラムとして0.681 mの部材が見つかったので、プロナオスの内部柱の下部は切り込みを施され配置されていたと考えられた。内部柱の下部直径は0.681 mとした。

以上が部材の組み合わせである。南東側のアンタ用トイコベート部材 Δ 47の形状や、 Δ 117+ Δ 118の反対側の側面の形状から、これらと同様の敷居が中央と、南側にも設けられたと考えられる。敷居の痕跡は前面に正方形の穴、一段下って長方形の穴が施されている。ダボ穴の形状だけで判断するのであれば正方形の加工は、扉の軸受けになると考えられる。²²⁾

しかし、敷居に段差をつけるのであれば、本神殿のナオスの入り口のように、軸受け部分を一段下げ、立て枠部分を高く、もしくは同じ高さにするのが普通である。また、仮に、この正方形のダボ穴が軸受けだとするならば、後方のダボ穴の位置に作られる立て枠によって扉はうち開きにはならないので、外開きの扉となる。外開きの扉というのは古代ギリシア建築ではあまり例がない。よって、この正方形のダボ穴は立て枠のためのものであるとし、後方のダボ穴を用いて扉が設けられていたと考えた。南側と中央にも同様に扉が設けられたと考えられる。

同じようにプロナオス入口に扉が設けられた神殿としてはエギナのアファイア神殿があげられる。²³⁾ しかしながら、メッセネ神殿の敷居とは違い、軸受け穴と門穴のみの簡潔なものだった。このような簡潔な施工で扉が設置できるにもかかわらず、メッセネ神殿の敷居がなぜこのような複雑な形状をしていたのかは不明であった。

また、オピストドモス側のアンタ用トイコベート部材 Δ 223、 Δ 577+ Δ 580にはプロナオス側に見られたような切り込みは見られない。このことからプロナオス側に扉はなかったと考えられた。

9) 床の相対高さ

各フロアでの床の相対高さについて検討する。トイコベート部材の形状から、プロナオス、オピストドモスではプテロンと床のレベルは同じであり、ナオス部分では床のレベルが高くなっていることがわかる。ナオス側面壁用のトイコベート部材の高さは0.405mであり、内側上部に深さ0.080m切り込みが施されている。この部分に内部の床舗装部材が配置されたと考えられる。内部の床舗装部材と断定できるものは出土していないが、敷居部材との関係から内部の床舗装部材の厚さを検討する。敷居部材はプロナオス仕切り壁用トイコベート部材 Δ 11、 Δ 17の上に配置され床舗装部材の上に置かれる形となることから、敷居部材の高さが、床舗装部材との相対高さと考えてよい。敷居部材の前方の高さは0.400mで後方の高さは0.335m

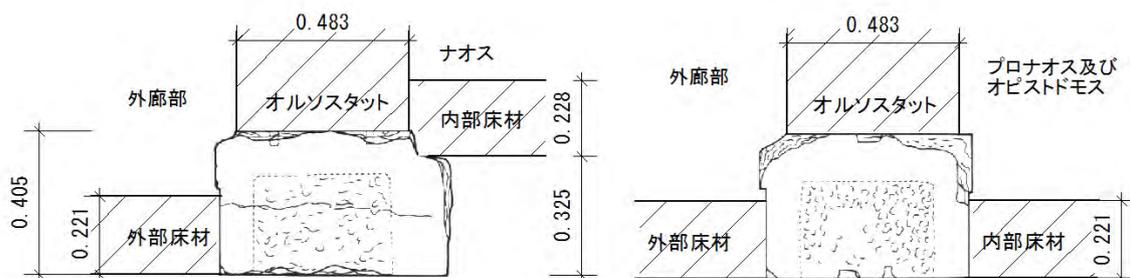


図3-28 床の相対高さ

であったので、プテロンの床舗装部材のレベルを0とするとナオス内の敷居高さは+0.335 mとなった。また、敷居部材は背面が荒く仕上げられていたため、背面は部材との接触面であったと考えられ、敷居背面の上部まで床舗装舗装がされていたことは確かである。したがって、敷居部材の背面の高さが、レベルの差となり、ナオスの床のレベルはプテロン、プロナオス、オピストモスよりも0.335m高くなっていることがわかった。また、ナオスの床舗装部材の厚さは0.231 mとなることがわかった。²⁴⁾ 床舗装部材よりもやや厚い部材が使われていた。

また、前項の復元からプロナオスの敷居はプテロン部分よりも0.231 m高くなっていることがわかった。

10) 内陣の位置の決定

ここまでで、トイコベート部材とオルソスタット部材の配置が決定した。次に、神殿全体における内陣の位置を決定する。ここまでの考察から、内陣部分の側面壁の長さは14.289mであることがわかった。この値は、外部柱の柱間7スパン分に柱の下部直径を足した長さ、つまり柱8本の外法長さ14.248mにほぼ等しい²⁵⁾。一般的にアンタの位置は周柱に対応して配置されることが多く、特にの隅から3番目の柱に対応することが多い²⁶⁾。また、神殿東側のプテロンの床舗装部材の基礎付近にアンタの部材が配置されたことが推測できるので、東側のアンタのオルソスタット部材を神殿東端から3番目の柱に対応させて配置されていたとすることは妥当な判断と言える。東側のアンタのオルソスタットの先端が神殿東端から3番目の柱の東側の面と対応しているとして配置を行うと、西側のアンタのオルソスタットの先端は神殿西端から3番目の柱の西側の面に対応することとなった。

ここまでで、平面の復元が完了した。

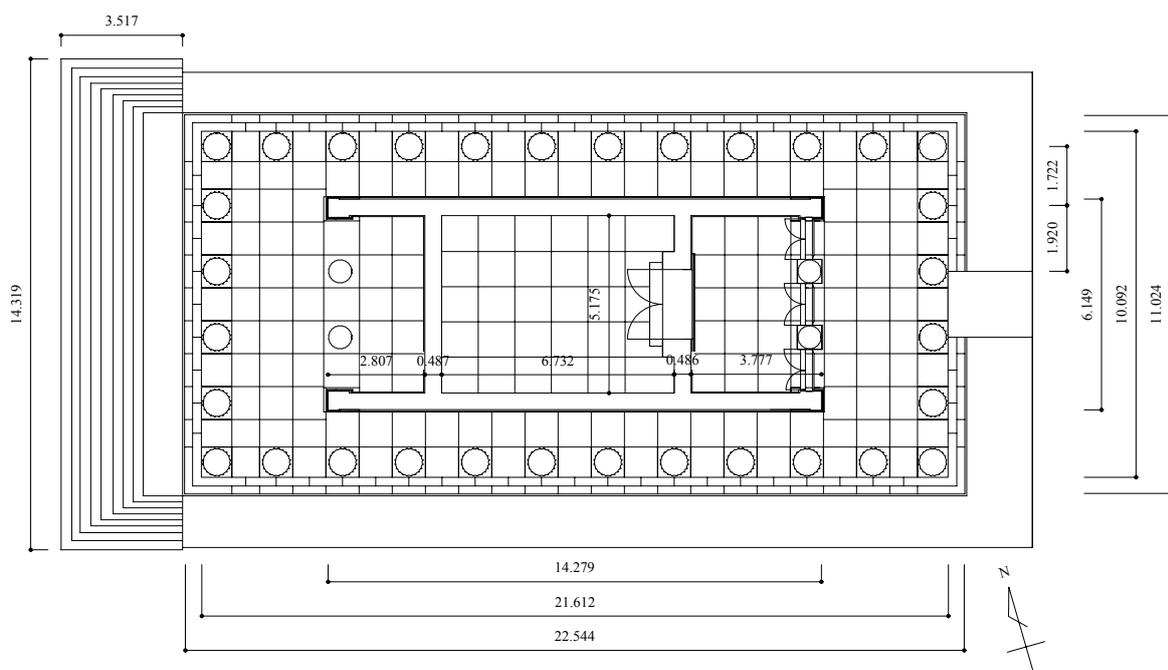


図3-29 メッセネ神殿復元平面図

3. 立面の復元

ここまでの復元により、平面の復元が完了した。次に立面の復元を行う。

1) エンタブラチャーの復元

a. アーキトレーヴの復元

アーキトレーヴ部材は、完全な形で残っているものはなかったが、これまでの復元から長さを特定することができた。まず、現存するアーキトレーヴ部材の中で、もっとも長い部材 $\Delta 85+$ $\Delta 86$ に関して復元を行う。アーキトレーヴは柱の上に載る梁の役割を果たすため、柱の真々間距離、つまり柱間寸法が基本となるアーキトレーヴの長さとなる。柱間寸法は前項で求めたので、アーキトレーヴの長さは 1.920 m だとわかる。また、ドリス式のアーキトレーヴには前面上部にレグラが設けられ、レグラの下には 6 個のグッタエが施されている。レグラは通常、トリグリフに対応して付けられるため、部材中央に一つ、部材端部に半分の長さのレグラがひとつずつ設けられたと推測できる。²⁷⁾ $\Delta 85+$ $\Delta 86$ のレグラとグッタエは欠損がひどくグッタエの一つ一つの大きさが不明瞭であるため、比較的良好な状態で残っている $\Delta 166$ から復元を行った。現存部分から元の大きさを復元すると、0.384 m となった。この値は、トリグリフの正面長さとはほぼ一致し、妥当な値と言える。²⁸⁾ この値からレグラ間の距離を求めると、内法で 0.576 m であった。²⁹⁾ この寸法を $\Delta 85+$ $\Delta 86$ に当てはめると部材端のレグラは欠損部分に位置していたことがわかる。これで基本寸法のアーキトレーヴが復元できた。

次に、 $\Delta 166$ に注目する。 $\Delta 166$ は上面に矩形のダボ穴と鉛を流し込むための溝があり、背面にはアナシロシスが途中で分断された痕跡が残っている。このことから、この部材は、隅の部材であったことがわかる。 $\Delta 166$ には背面に直交する形でアーキトレーヴ部材が接合された。また、アーキトレーヴのバック部材 $\Delta 294$ は 45 度に加工されており、隅部材の背面に接合されたことがわかった。

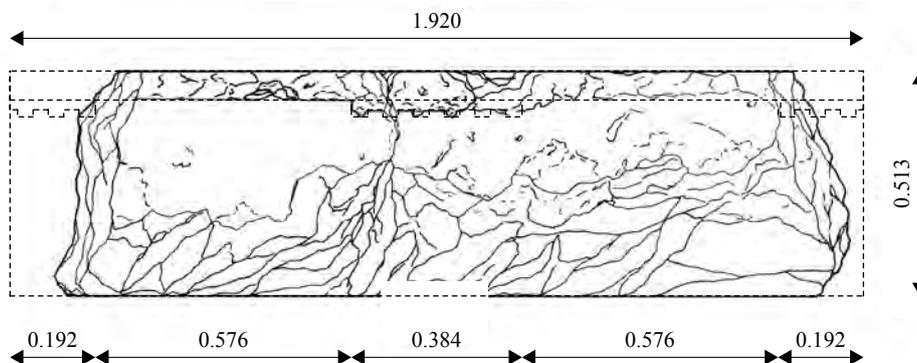


図 3-30 アーキトレーヴ部材 $\Delta 85+$ $\Delta 86$ 復元図

b. フリーズの復元

次にアーキトレーヴの上に載るフリーズ部材に関して復元を行う。

メッセネ神殿においてトリグリフとメトープは同じ部材として作られていた。しかしながら、完全な形で残っている部材は見つかっていない。まず、トリグリフについて復元を行う。トリグリフの正面長さがわかる部材は2個出土（△ 159、△ 406）しているが、△ 159は後述する外周部のトリグリフの幅よりも小さくなっており、内陣に使われた部材であると思われる。また、△ 406はトリグリフの正面長さが他の部材から推測されるトリグリフの長さよりもやや短い値を示し、内陣部のトリグリフである△ 159に近い値を示している。そこで、現存する外周部のトリグリフでもっとも残りの良い△ 279を参照しトリグリフの正面長さを決定した。その値は0.383 mとなった。（PLATE100参照）この値は、前述したアーキトレーヴのレグラの正面長さや、後述するコーニスのミューチュールの長さにはほぼ等しくなることから妥当な値といえる。

トリグリフの正面長さが決定したことで、柱間寸法からメトープの長さを決定することができる。

柱間寸法 1.920 (m)

$$2T + 2M = 1.922 \quad (T: \text{トリグリフ正面長さ}, M: \text{メトープ正面長さ})$$

$$T = 0.383 \text{ (m) より}$$

$$M = (1.920 - 0.383 \times 2) \div 2 = 0.577 \text{ (m)}$$

と決定することができた。

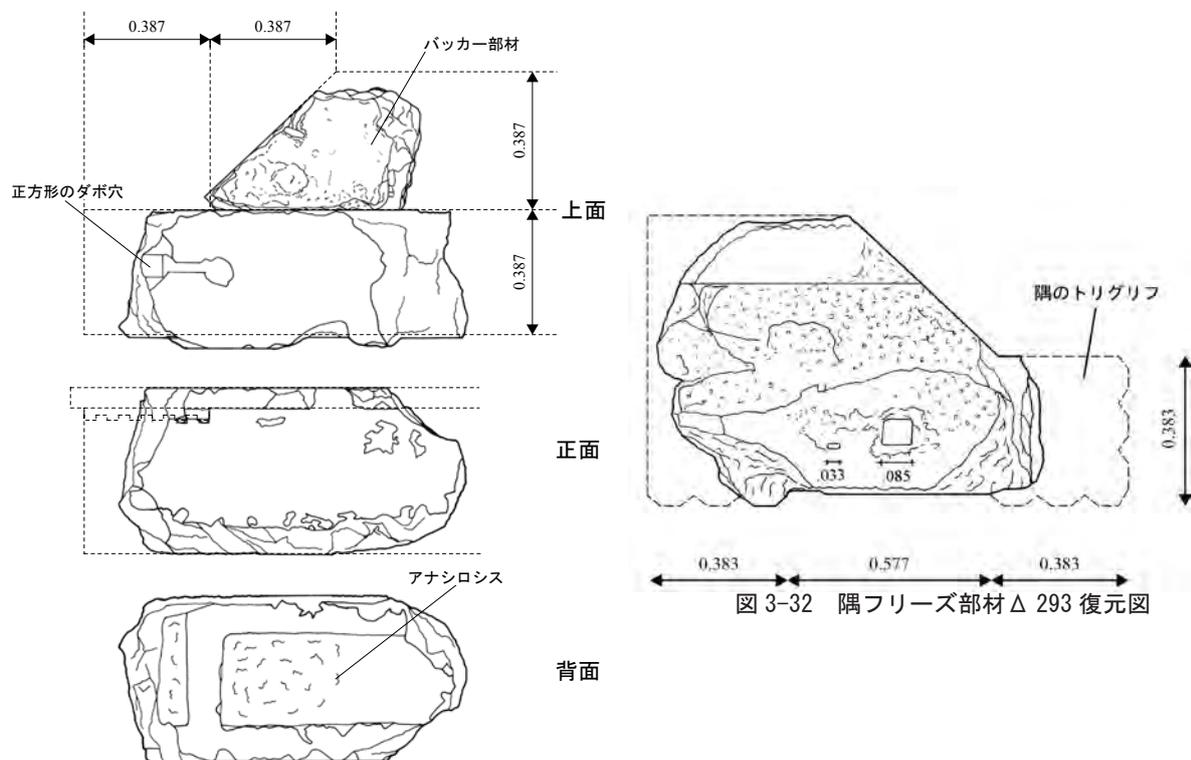


図 3-31 隅アーキトレーヴ部材△ 166 復元図

図 3-32 隅フリーズ部材△ 293 復元図

次に、 Δ 293 に注目する。(PLATTE101) Δ 293 は上面に矩形のダボ穴が施されており、背面が 45 度加工されていることから、隅の部材であることがわかる。この部材は比較的保存状態がよく、フリーズ部材の奥行きと高さを知ることができた。高さは 0.589 m で、奥行きはメトープ部分で 0.565 m、トリグリフを含めると 0.607 m であり、その後ろに天井部材を載せる突出部が幅 0.170 m 残っていた。隅のトリグリフ部材 Δ 273 の形状から推測すると隅のフリーズ部材 Δ 293 は図のように (図 3-31)、端部に正面側面両方にトリグリフが付けられた部分が付随していたと考えられた。

次に、 Δ 159 に注目する。 Δ 159 は先述した通り、メトープの奥行きが他のフリーズ部材よりも約 10 cm 小さくなっている。また、部材の高さもやや小さくなっており、0.578 m であった。そこで、この部材は内陣部につかわれたフリーズ部材であったと考えた。しかし、この部材は L 字型に加工された痕跡が残っており、内陣部としても、どのように配置されるのか不明であった。そこで、通常の神殿の例ではほとんど見られないが、内陣の側面にトリグリフが用いられたとして配置を検討した。その結果、 Δ 159 の幅は 0.470 m で内陣の壁とほぼ同じ値を示しており、L 字に曲がった部分もその半分の 0.235 m であった。仮に、図 3-33 のように配置したとするならば、L 字の内側部分はナオスの壁を支えた突き出し部分であったことがわかる。しかし、これは推測の域をでない。だが、最近の研究成果によって、同都市内のアスクレピオス神殿には内陣の側面にもトリグリフがつけられていたことがわかっている。³⁰⁾ 同じ都市内に建設され、建設時期も近いとされるこの神殿は、メッセネ神殿と互いに影響を受けていたと考えられるため、メッセネ神殿においても内陣側面にはトリグリフが設けられていたのかもしれない。

c. コーニス、シーマの復元

コーニス、シーマ部材はほとんど残っておらず、完全な形で出土したものはなかった。しかしながらひとつひとつの部材に注目することで、いくつかの情報を得ることができた。まず、軒部分のみが残っているコーニス部材 Δ 717 に注目する。 Δ 717 にはレグラ、トリグリフに対応して、設置されるミューチュールの一部が残っている。ミューチュールの中には横 6

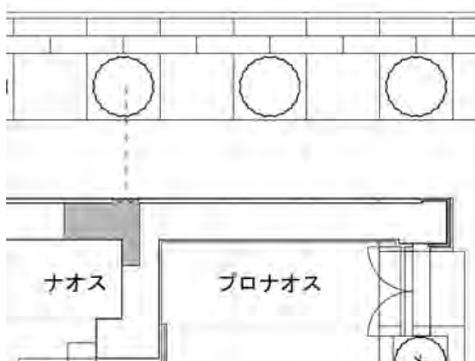


図 3-33 Δ 159 の収まり

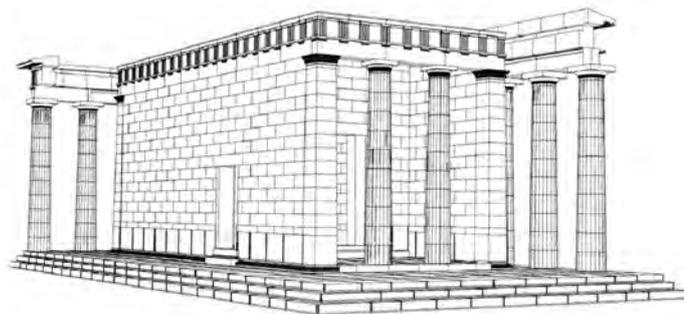


図 3-34 アスクレピオス神殿内観パース

列、縦3列、系18個のグッタエが配置されるため、既存の部分の寸法から、ミューチュールの元の大きさを復元することができた。その正面長さは0.389 mであった。³¹⁾(図3-34)また、ミューチュールの間隔は部材の寸法から0.093 mだとわかる。ミューチュールはトリグリフに対応し、さらにメトープの中心にも配置されることから1柱間に3個と半分の長さが2個配置されることとなる。復元値からこの長さを求めてみると、1.928 mとなり³²⁾、やや誤差はうまれるが、おおよそ柱間寸法と一致することがわかった。

さらに、 $\Delta 380$ は部材の風化が激しいが、屋根の勾配がわかり、その値は1/4.48であった。勾配がわかる部材はこれ以外には見つかっていないため、この値を使い復元する。また、 $\Delta 380$ には軒となる部分の一部が残っているため、先に述べた $\Delta 717$ を用いて、軒の出を復元することができた。その値は0.2765 mであった。また、 $\Delta 380$ の傾斜から、復元したコーニスの高さを算出すると、0.175 mであることがわかった。シーマに関しては、欠損がひどく、前面に装飾があったかどうかも定かではない。しかしながら、屋根ふちの部分は形状がかるうじてわかり、コーニス部材と組み合わせ復元を行った。(図3-35)

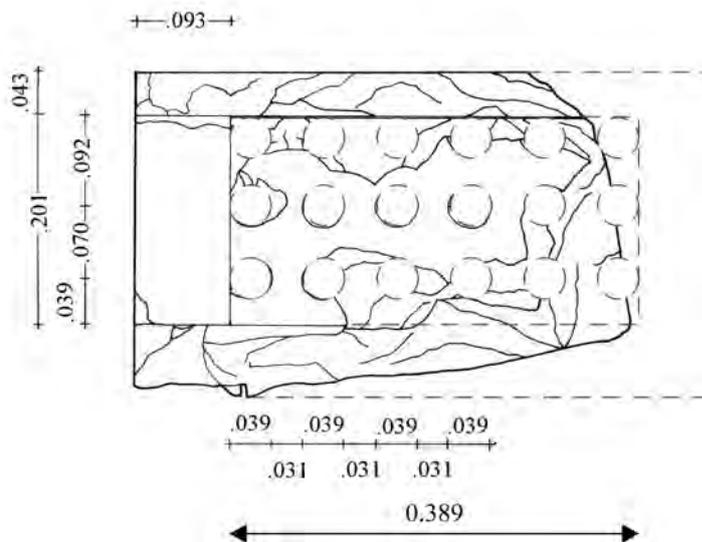
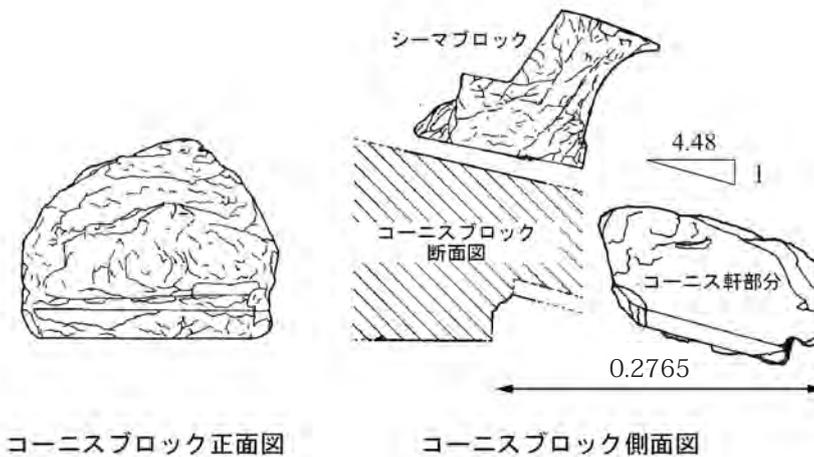


図3-35 コーニス部材 $\Delta 717$ ミューチュールの復元



コーニスブロック正面図 コーニスブロック側面図

図3-36 コーニス、シーマ復元図

d. エンタブラチャー部材の収まり

ここまでで、エンタブラチャー部材の復元が完了した。アーキトレーヴは前面と後面に分かれて配置され、互いにクランプによって接合されていた。隅は、前方の一方が飛び出し、前面側面両方にレグラを持つアーキトレーヴが使われた。(Δ 166) これに対し、バックカー部材は角を45度に切り込まれた部材が2つ組み合わさり、背面を構成している(Δ 294)。前面の飛び出し部分の上面には正方形のダボ穴が設けられ、上部に配置されるフリーズ部材と接合されていた。フリーズ部材はアーキトレーヴのように2つの部材で構成されているわけではなく、1個の部材で構成され、背面には天井を載せるためのせり出し部分が設けられている。隅の収め方は、一方のフリーズ部材が前面側面両方にトリグリフをもつ飛び出し部分と背面を45度に切り込まれており(Δ 293)、もう一方は、それとかみ合う形で配置された。飛び出し部のトリグリフは底面を正方形のダボ穴で固定されていた。(図3-36)

コーニス、シーマに関しては、出土部材が少なく、施工痕もほとんど残っていないことから、おさまりの詳細を知ることはできなかった。

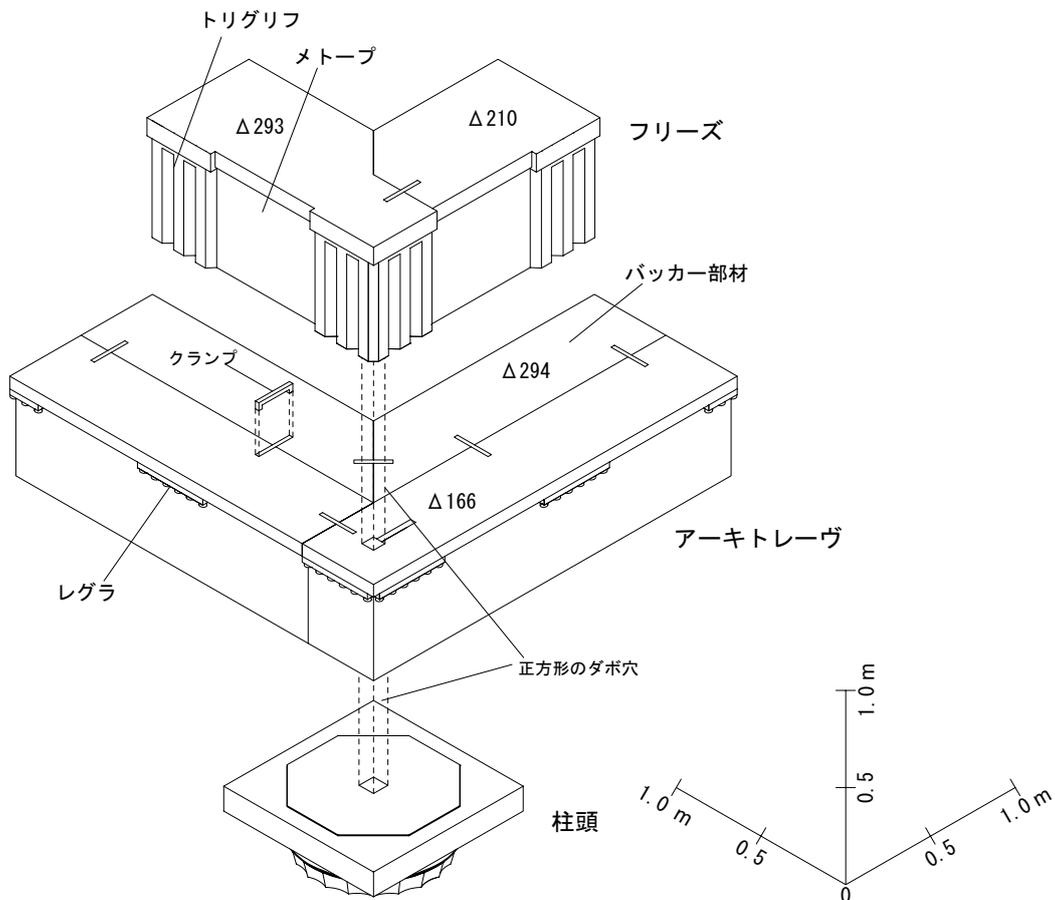


図3-37 エンタブラチャー隅部材

e. 柱の復元について

次に、柱の復元を行う。柱の下部直径はスタイロベート部材Δ 43の上面に残るフルーティングの痕跡から、0.808 mと決定することができた。³³⁾ 次に、柱頭の部材の寸法を決定する、柱頭の部材は2個が出土しているが、保存状態の良かったΔ 32の寸法を参照し、復元寸法とした。復元寸法は、柱の上部直径が0.689 m、アバクスの幅が0.882 m、柱頭の高さが0.332となった。次に柱の高さについてであるが、柱のドラム部材は25個の部材に関して実測を行ったが、いずれの部材も破損状態がひどく、元の部材がどのような寸法地値をとっていたかを判断するのは難しかった。また、部材の必要数に対して、部材の出土数も少なかったため、部材が他の建築物に再利用されたとも考えられ、現状の円柱ドラムの部材のみを使っての柱の高さの復元はできなかった。

そこで、次章において、他のドリス式神殿との比較から柱の高さを決定することとする。

ここまでで、柱の高さを除く、復元が完了した。

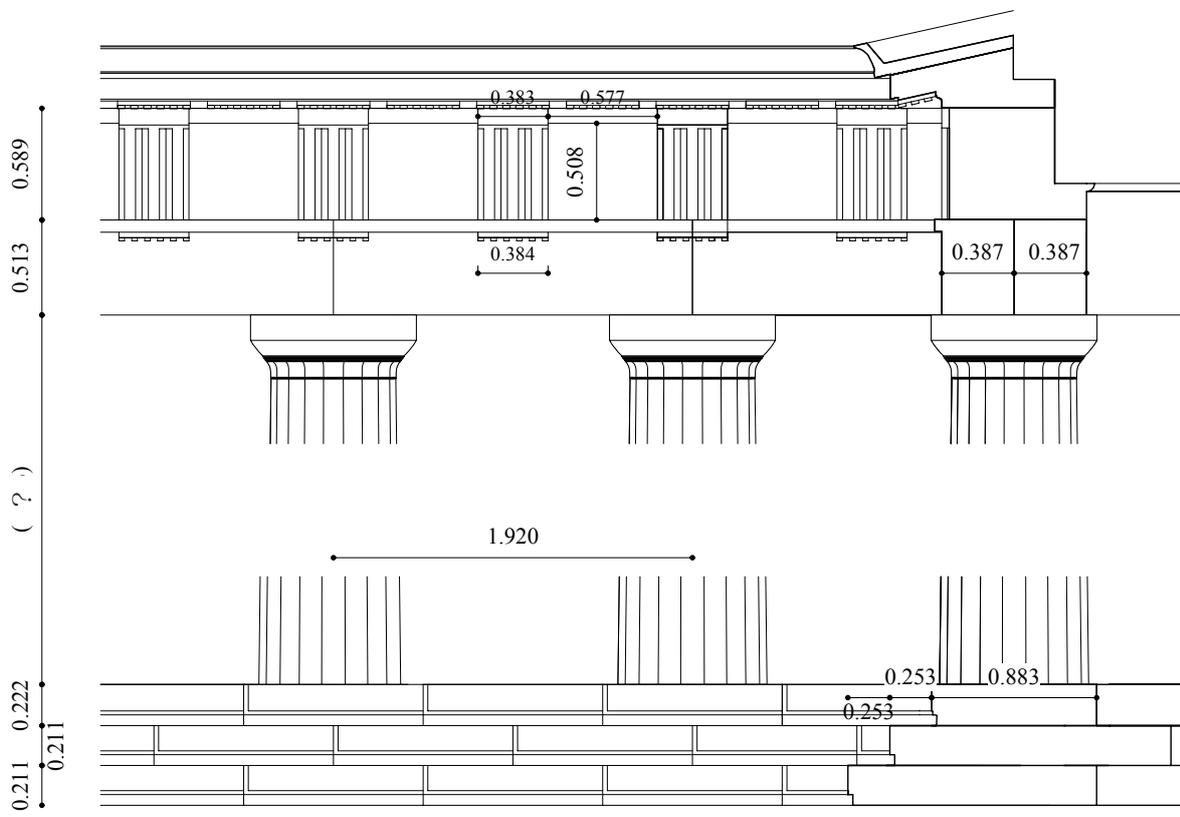


図 3-38 オーダー詳細図

(第3章註)

- 1) 同じ寸法として対応して使われるスタイロベート部材、床舗装部材、トイコベート部材の長さを比較分析した。(図3-2参照) 通常のスタイロベート部材の正面長さの平均値は0.960 m、床舗装部材の正面長さの平均値は0.961 mであった。また、14個残っているトイコベート部材の部材長さの平均値は0.960 mであり、通常のスタイロベート部材の正面長さとも一致することがわかった。
また、トイコベート部材の部材長さでその標準偏差を求めると0.009 mのばらつきが見られた。このことからスタイロベート部材に関しても同様の誤差はあったと考えられる。この施工精度から隅のスタイロベート部材に関して単順に施工誤差と考え復元を行った。
- 2) 柱の載るスタイロベート部材の上面のダボ穴は部材のほぼ中央につけられていた。このことから柱はスタイロベート部材の中心に載せられたと考えられる。スタイロベート部材は柱が載る部材と載らない部材が交互に配置される。つまり柱間寸法は柱の載るスタイロベート部材の正面幅の半分の2倍と柱の載らないスタイロベート部材の正面長さを足した値になる。前掲註1)より、柱の載るスタイロベート、柱の載らないスタイロベートのどちらの寸法も0.960 mと決定したので、結果として柱間寸法はスタイロベート部材の正面長さの2倍の1.920 mとなる。
- 3) 前掲註1) 参照
- 4) Coulton 1977, pp. 79-80.
- 5) Sioumpara 2006, TAFEL7
- 6) レグラの正面長さはアーキトレーフ部材 Δ 166 を参照して0.384 mと復元できた。トリグリフの正面長さについてはフリーズの復元の項を参照
- 7) ここまでの復元で、隅から2番目のスタイロベート部材の正面長さは0.803 mと決定することができた。部材の目地は互い違いに配置されるため、このクレピスも隅から2番目に使われたと考えられる。
- 8) 例外として、3段設置される神殿も存在する。例えば、コリントのアポロ神殿に見られる。しかしこのような例は稀である。
- 9) 正面柱数が6本のドリス式神殿は数多く見つかっており、より一般的な形といえる。
Dinsmoor 1975, figs. 33, 35, 36, 42, 43, 55, 56, 67 参照。また、例外として7本であるアクラガスのゼウス神殿(同 fig. 40 参照)、8本であるアテネのパルテノン神殿(同 書 fig. 57 参照)などが挙げられる。
- 10) Hodge 1966, Plate V, XI ネメアのゼウス神殿の基礎では柱や壁の部分の基礎は隙間のない密着した基礎が使われ、床舗装部材の部分では基礎は隙間をあけて配置されている。
- 11) トータルステーションにより、東側スロープの基礎の絶対高を測定した。その結果は329.193 mとなっており、おおよそ同じ値を示していることがわかる。
- 12) (階段5段目の絶対高さ - 階段1段目の高さ) / 4 = (328.360 - 327.55) / 4 = 0.203 m
- 13) 前掲註10)
- 14) 底面の正方形のダボ穴位置から他のアンタのオルソスタット部材では該当しない。Δ 22のみが底面部分が欠損しているため、該当する可能性があった。
- 15) オルソスタットは下に配置されるトイコベート部材の約2倍の長さになっている。また、トイコベート部材には部材上面中央にダボ穴が施されているものがあるため、オルソスタット部材は底面端部をトイコベート上面中央とのダボで接合され、ダボ穴のないトイコベート部材1個をまたぐ形で配置されることがわかる。

- 16) ここまでの考察から内陣の長さは17.137mよりも小さくなるはずである。仮にプロナオスにオルソスタット部材が1枚追加された場合、プロナオスの長さは5.695m。さらにナオス側面壁の長さが7.708m（後述）、オピストドモス側面壁の長さが2.807m（後述）であり、これらを合計すると16.210mであり最大値との差はわずか0.927mである。階段が設けられ西側からのアプローチが考えられるメッセネ神殿においてこの数値は考えにくい。
- 17) 前掲註16)
- 18) ここまでで配置が確定したプロナオス、オピストドモスの側面壁のトイコバート部材には上面のダボ穴に対して東側にてこ穴が設けられている。てこ穴によって部材をダボの位置まで移動させ、設置を行うので、オルソスタット部材は西から東に配置されたことが分かる。
- 19) 北側に配置したトイコバートの寸法からナオス側面壁の長さを復元した。部材がなかった部分に関しては平均値の0.960mを加えることとした。詳しい数値は次の通り、 $0.505 + 0.960 + 0.958 + 0.968 + 0.942 + 0.961 + 0.960 + 0.478 = 6.732$ (m) となる。
- 20) 5.175mから交差部のトイコバート部材の突き出し部分の長さを引いた長さがトイコバート部材が補う長さである。つまり $5.175 - 0.414 - 0.415 = 4.346$ (m) よってトイコバート部材は5個配置されたことが分かる。
- 21) $\Delta 575 + \Delta 576 + \Delta 579$ 及び、 $\Delta 15$ は底面が欠損しているため、底面のダボ穴が確認できなかった。このことから落とし込み部材である可能性がある。
- 22) 実際に、メッセネ神殿においても、ナオス入口の敷居では正方形の軸受け穴と長方形のダボ穴によって立枠が固定されていた。
- 23) アファイア神殿ではプロナオスの入口部分と東側外部列柱部分に扉が設けられていた。Banke1 1993, Plate54を参照。
- 24) ナオスに使われていた床舗装部材の厚さはナオスの相対高さに外部の床材高さを足した値からナオス用トイコバート部材の床材用の切り込みまでの高さを引いた値となるので、 $(0.335 + 0.221) - 0.325 = 0.231$ (m) となる。
- 25) 柱間寸法は1.920mであり、柱の下部直径は0.808mであった（後述）。 $1.920 \times 7 + 0.808 = 14.248$ (m)
- 26) 内陣は周柱に関連付けて配置されることが多く、アンタの先端や、その中心軸、またナオス、プロナオスの仕切り壁等を外部柱の面や中心軸に対応させる例は多く見られる。今回の場合は床舗装部材の基礎の位置、プロナオスのアンタのトイコバート部材が東端から3本目の柱の付近に配置されたと考えた。また、内陣側面壁の長さから、柱の面とアンタの壁の先端をあわせる形で配置した。本神殿と同様の例は以下を参照。
- Temple of Zeus Olympius at Acragas : Bell 1980, ILL. I.
Temple of Athena at Assos: Clarke 1902, fig. 3
Hephaesteum at Athens: Travlos 1971, fig. 335.
Temple of Apollo at Bassae: Cooper 1992, Plate 10.
Heraion at Paestum: Lloyd 1972, fig. 361.

- 27) 通常、ドリス式オーダーではひとつの柱間に対して、メトープが2個配置される。例外として、ひとつの柱間に対して3個のメトープが配置される場合があるが、 $\Delta 85 + \Delta 86$ の長さから2個のメトープが配置されることは明白である。レグラはトリグリフに対応して配置されるので中央にひとつ、両側端部に半分ずつ配置される。3メトープ方式のドリス式神殿は例えば、ペルガモンのアテナポリアス神殿があげられる。R. Bohn 1885.
- 28) 前項よりトリグリフの正面長さは0.383 mである。
- 29) 柱間寸法の半分の値からレグラの正面長さを引けばよい。つまり $1.920 \div 2 - 0.384 = 0.576$ (m) となる。メトープの正面長さと同じとなる。
- 30) Sioumpara 2010, p14-15
- 31) 実測からグッタエの寸法と間隔は一定であったので $0.039 \times 6 + 0.031 \times 5 = 0.389$ (m) となる。
- 32) つまり、ミューチュール4個分の長さ、ミューチュール間の内法寸法4個分を足せばよいので、 $0.389 \times 4 + 0.093 \times 4 = 1.928$ (m) となる。
- 33) $\Delta 43$ の上面の痕跡から下部直径を判断するとアリス間での半径が0.404 mであった。その値を2倍することで直径とした。

(図版出典)

- 図 3-1 : 隅のスタイロバート部材、筆者作成
- 図 3-2 : 床部材寸法表、筆者作成
- 図 3-3 : 基壇隅詳細図、筆者作成
- 図 3-4 : スタイロバート復元平面と長手断面図、筆者作成
- 図 3-5 : 推測される内陣の形状、筆者作成
- 図 3-6 : 敷居とプロナオス仕切り壁（復元）を東より見る、伊藤重剛撮影
- 図 3-7 : 敷居及びプロナオス仕切り壁復元図、筆者作成
- 図 3-8 : 敷居とプロナオス仕切り壁用オルソスタット部材 $\Delta 20$ 復元図、筆者作成
- 図 3-9 : 神殿南東部 プロナオス側面壁復元図、筆者作成
- 図 3-10 : 南東プロナオス側面壁（復元）を南東から見る、伊藤重剛撮影
- 図 3-11 : 南西オピストドモス側面壁（復元）を南から見る、筆者撮影
- 図 3-12 : 神殿南西部 オピストドモス側面壁復元図、筆者作成
- 図 3-13 : ナオス側面壁トイコバート配置パターン、筆者作成
- 図 3-14 : ナオス側面壁トイコバート復元図、筆者作成
- 図 3-15 : トイコバート部材配置図、筆者作成
- 図 3-16 : オルソスタット部材配置図、筆者作成
- 図 3-17 : オルソスタット部材から見る壁ブロック部材長さ推定表、筆者作成
- 図 3-18 : 南西部オピストドモス側面壁壁ブロック部材配置、筆者作成
- 図 3-19 : トイコバート配置底面見上げ図、筆者作成
- 図 3-20 : プロナオス入口敷居の復元使用部材と部材の収まり、筆者作成
- 図 3-21 : プロナオス敷居のスタイロバート部材 $\Delta 130$ 、伊藤重剛撮影
- 図 3-22 : プロナオス敷居部材 $\Delta X6$ 、筆者撮影
- 図 3-23 : プロナオス敷居の底面の切り込み、筆者撮影
- 図 3-24 : プロナオス敷居部材復元図、筆者作成

- 図 3-25 : プロナオス敷居復元図、筆者作成
- 図 3-26 : エギナのアファイア神殿の敷居、Fiechter 1906, Tafel 31 を筆者が加工したもの
- 図 3-27 : エギナのアファイア神殿パース、Bankel 1993, Tafel 36
- 図 3-28 : 床の相対高さ、筆者作成
- 図 3-29 : メッセネ神殿復元平面図、筆者作成
- 図 3-30 : アーキトレーヴ部材 Δ 85+ Δ 86 復元図、筆者作成
- 図 3-31 : 隅アーキトレーヴ部材 Δ 166 復元図、筆者作成
- 図 3-32 : 隅フリーズ部材 Δ 293 復元図
- 図 3-33 : Δ 159 の収まり、筆者作成
- 図 3-34 : アスクレピオス神殿内観パース、Sioumpara 2010, p 19. fig4. Asclepius Temple. Restored Cella from SE より
- 図 3-35 : コーニス部材 Δ 177 ミューチュールの復元、筆者作成
- 図 3-36 : コーニス、シーマ復元図、筆者作成
- 図 3-37 : エンタブラチャー隅部材、筆者作成
- 図 3-38 : オーダー詳細図、筆者作成